
あの日の9回ウラ

ヒロヒト.JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日 の 9 回 ウラ

【Nコード】

N1823F

【作者名】

ヒロヒト. JJ

【あらすじ】

高校野球全国大会の地域予選。青春台高校の9回ウラの攻撃だけをメインにした物語。点差は10点。更に敵チーム美徳館学園はこの場面で、プロも注目するエース・羽柴を投入。盤石な必勝態勢。しかし、ここから青春台の猛反撃が始まろうとは誰もが予想だにしていなかった。

プロローグ

19××年7月

北・北海道大会3回戦

●美徳館学園 びとくかん VS 青春台高校 せいしゅんだい

スコアボード

／／	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
美徳館	0	3	2	0	2	0	0	3	4	14
青春台	0	0	0	0	1	0	0	3	—	4

誰が見ても勝敗の行方は明らかだった。

九回表を終わって14対4の10点差。反撃のチャンスも九回裏を残すのみ。

青春台高校の勝ち目は99%：いや100%ないに等しい。

八回裏までに4点を取り返したものの、それは全て4番・高藤 たかふじ のホームラン。

まさに風前の灯 ふうぜんとうしひ。

五回表を終わった時点で、すでに7点差。

その5回裏に、かろうじて一矢を報いたのが高藤の一発。

だがソロホームランのため、点差は1点縮まったのみ。

そして6点差のまま八回に突入するが、美徳館が更に3点の追加点。

絶望的な9点差になり、まさにコールド負けのピンチ。

それでもその裏、意地の攻撃が始まる。

青春台はやや疲れの見え始めた美徳館の先発ピッチャー・北条 ほうじょう を攻める。

ランナーを二人出したところで高藤の3ランが飛び出て再び6点差。

コールド負けの屈辱だけは免れた。

だが、青春台のエース・一橋いつはしもついに九回表に力尽き、ダメ押し
の4点を奪われ、この試合最大の10点差で九回裏を迎えることにな
った。

更に、とどめを刺すと言わんばかりに、美徳館学園はここでエー
ス・羽柴はしばしを投入。

完璧な必勝態勢。誰もがそう思った。

この物語は、ミラクルを信じて最後まで戦った、青春台高校野球
部員の9回裏の攻撃だけにスポットを当てた逸話である。

(続く)

1話 記者会見

20××年10月

ひとりのベテランプロ野球選手が、まぶしいほどのフラッシュを浴びていた。

けたたましく鳴り続けるシャッター音。というか鳴りやまないシャッター音。

それらがようやく一段落した数分後、記者たちからのインタビューは始まった。

「高藤選手。生涯の現役野球生活の中で、一番印象に残っている試合は何ですか？」

今、高藤雄一たかふじゆういちは、清々しい気分で引退会見に臨んでいる。

プロ野球生活25年間。高卒からドラフトで入団して現在43歳。この晩年は、代打専門で一軍にはいたものの、体力の限界を感じ引退を決意した。

——これだけやれたのだからもう悔いはない。そう思えるようになったとき、彼の気持ちに一片の曇もなくなっ

た。

そんな中でのこの問いに、彼が真っ先に思い出した記憶。

それは高藤が生涯忘れることのできないメイクドラマを蘇らせることになる。

「それは僕の…高3の最後の夏の試合ですね」

躊躇なく答えた高藤の発言に、記者たちは驚きを隠せない。

「あの…高藤選手。プロに入団してからの試合よりも、高校時代の試合の方が印象に残っているということですか？」

「ええ、そうです。あれが今の僕の原点でした」

会場がざわついた。記者は引き続き、その理由を問う。

「高藤選手。あなたはプロ生活でサヨナラホームランを13度、そのうち逆転サヨナラが9度という、とてつもない記録を持っていますよね」

「ええ。お陰様で打たせてもらいました」

「なのに、それらのどのホームランよりも、高校時代の方が印象に残ると？」

高藤は終始穏やかな表情で応える。

「はい。高3の時の試合を経験したからこそ、僕はプロに入ろうと決意したんですよ」

「そう…ですか。。」

記者たちの中で数人、小声で囁きながら頭をかしげる者がいた。

「高藤選手が高3のときって、甲子園に出たっけ？」

「いや…どうだっけ？高2のとき出てたのは知ってるんだけど…」

「あ、そうそう。彼、高3のときに転校したはずだぜ。しかも無名の高校に」

「そっかあ…昔のことだし覚えてないなあ。ちょっと調べてみるか」

高藤の発言をすぐに理解できる者はこの会場には一人もいなかった。

理解しているのは、この引退会見をテレビを通して観ている数名のみ。

そう、青春台高校野球部の同期生だけだった。

このかつてのチームメイト全てが、それぞれの立場でこの中継を、テレビの前から感慨深く観ていたのである。

そして全員が心に思い浮かべたことが、あのときの壮絶な試合。

VS 美徳館学園戦。

あのときはチームメイト全てが主人公だった。。

(続く)

2話 敵エース・羽柴登板の謎

●19××年7月

シード校の強豪・美徳館が、地区予選の3回戦程度でエースを登場させることなど前例がなかった。

いくら先発投手の北条に疲れ見えてるとはいえ、余裕の10点差でプロ級の羽柴をリリーフさせるのは、まさにイジメのようなものだが、これにはちゃんとした理由があった。

それは羽柴が、全国でも屈指のスラッガーと目される青春台高校の4番・高藤雄一との対戦を熱望していたからだ。

3年生の高藤は、2年生の去年まで、関東地区の強豪校に在籍。甲子園でも常連の名門校。昨年の夏の選手権では、チームはベスト8で敗退したが、彼は4試合でホームラン9本。打率8割5分という驚異的な数字を残した。

そんな高藤が、親の仕事の都合という理由で、3年の1学期からこの北海道に転校して来たのである。

しかし、なぜ彼がこんな無名の高校を選んで野球部に入部したのか、その理由は誰も知らない。

しかもこの高校は、毎年受験生が定員割れする郡部に位置し、来年より隣の高校と統合が決まっていた。

そして新設校として、名前も変わり新たに生まれ変わる。

だから現在、この学校には1年生と2年生はもういない

つまり、今の生徒が青春台高校最後の卒業生ということになる。

全員3年生の部員にとっては、まさに最後の夏。ラストゲームとなるのだ。

だが、美徳館のエース・羽柴にとってはそんなことはどうでもい

い話。

自分と同じようにプロから注目されている高藤と対戦できる絶好のチャンスが巡って来ただけのこと。

北・北海道代表として、2年連続甲子園出場を果たしている美徳館のエース・羽柴純一郎。

彼のプライドとして、この高藤と勝負して勝たねば、甲子園に行く意味などないと思えるほど、執念を燃やしていた。

そして羽柴は、蜂須賀監督も驚くほどの熱心さで登板を直訴し、マウンドへ上ることになったのである。

だが、気になることがひとつ。

9回裏の打順は8番から。このままでは4番の高藤には打席が巡って来ることはない。

羽柴にはある思惑があった。高藤と勝負するためには仕方のないことだと自分に言い聞かせて。

しかし、それが自分自身の過剰なオゴリによる大誤算だと、後になって気づかされることになる。

(続く)

3話 控え選手・田安 基（たやす はじめ）

青春台高校ナインは、土方監督のもと、円陣を組んでいた。
攻撃はこの9回裏のみ。

敵チームのマウンド上には、超高校級のエース羽柴。ナインは意気消沈する一方。

だが土方は指導者として、このまま凹んでるわけにはいかない。
生徒たちの最後の夏。青春台の最後の歴史。負けても最後の意地を見せたい。

そんな思いから彼は選手たちにハッパをかける。

「いいかお前たち、もっとプラス思考になれ！こんな全国屈指のピッチャーと対戦することなんて、一生のうちあるかどうかかわからんのだぞ！」

「は、はいっ！」

ナイン全員、返事も戸惑っている。

「いずれ羽柴はプロに入って活躍するだろう。そうなったらお前たちの記念にもなるんだぞ。そう思えば気分が楽にならないか？三振して当然だ」

監督の顔から目をそむけないナイン。戸惑いの中にも真剣な眼差し。

その言葉に選手たち全員から、開き直りが生まれた瞬間でもあった。

「お前たちは自分のバッティングをして来ればいいだけだ！思い切って振って来い！」

「は、はいっ！」

明らかに選手たちの声はさっきよりも気合が入っていた。

「ちょ…ちよっと待って下さい」

その時、一人の補欠選手がノートを携えてベンチから円陣に加わった。

「どうした田安^{たやす}? 用件は急げ。審判にせかされる」
監督に促され、素早くノートを開く田安。

青春台高校野球部員は、元々10人しかいなかった。
来年の廃校決定の余波もあって、新入部員もない。

かつて“さわやかイレブン”で全国的に有名になった徳島の池田高校よりもギリギリの人数。

その中でも田安はずっと補欠選手で雑用係だった。

気が小さい点を除けば、真面目でよく気がつき、雑用も黙々となす選手。

ところが大会の2か月前に、レギュラー選手の島津が交通事故で足を複雑骨折。

必然的に、田安にレギュラーの座が舞い降りて来たのである。

だが、田安はそれを喜んだりはしなかった。

その理由として、彼には前々から思うことがあったからだ。

——僕よりもレギュラーにふさわしい奴がいる！

そう、それが高藤雄一^{たかふじゆういち}。

3年生になった4月から転校して来たものの、野球部への入部希望はなかった。

その理由は誰にもわからない。

田安は積極的に高藤と交渉をした。

理由はどうであれ、どうかメンバーギリギリの野球部を救ってくれと。

その結果、約1か月間に渡る交渉の末、ついに高藤は田安に心を

開いたのである。

そして高藤の入部と同時に、自らレギュラーの座から身を引いた田安。

その田安が今、ベンチ前の円陣の中で、驚異的な縁の下の力持ち的存在になる。

「みんな、ちょっと僕の話聞いてくれ。実は僕、あの羽柴のクセを見つけたんだ」

一瞬黙るナインたち。

「ん？クセってなんだ？鼻クソほじるとか？」

「違うって^^； 投球のクセだよ。僕は今までずっと羽柴を偵察してたんだ」

「ほう：それで？」

「で、あいつが投げる球種を見破った気がするんだ。おそらく間違いない」

オオーw（＊。o。＊）wオオーw（＊。o。＊）w

一同から声が上がる。

「たとえ剛速球でも、変化球でも、投げる前に球種がわかれば、対応できるんじゃないかと思って：やってみる価値はあると思うんだ」この言葉に監督の土方も賛同する。

「よしっ！どうせダメもとだ。やれるだけのことはやり尽くして悔いを残すな！」

「オオーッ！」

ナインの士気が高まりつつあった。

（続く）

4話 8番ショート・岩倉貴雄（右投げ右打）

ここは最後の賭け。

先頭バッターの岩倉は、田安の言葉を信じてバッターボックスへ向かう。

マウンド上の羽柴の投球練習は、もうすでに終わっている。

田安の言う“球種のわかるクセ”が事実かどうかを確かめるには、まさにぶっつけ本番に限られた。

頭の中を整理しながらボックスに立つ岩倉。

『とりあえず、1球目は見逃して確認だ…』

ランナーがいなくても、セットポジションから投げる羽柴。いつものことだ。

その様子を食い入るように見る岩倉。

岩倉貴雄：彼の実家は弁当屋。家族だけで細々と営業している。フランチャイズの弁当屋に苦戦しながらも、地元の地盤を固め、家族総出で必死にサービスに務めている。

たとえまだ高校生の貴雄と言えども、例外ではない。

この日も朝4時から、注文の仕出し弁当作りに追われていた。

そんな真面目な彼は野球への情熱も強く、この強豪・美徳館に一矢報いてやろうという思いでいっぱいだった。

セットの構えに入る羽柴。それを目を凝らして見る岩倉。

マウンド上のピッチャーの足が上がった。

岩倉の脳裏に田安の言葉が蘇る。

——まず、構えに入ったときの羽柴の顔をよく見るんだ。投げる寸前に口元がキュツと締まったらストレート。

そしてまさに今、羽柴の口が締まった瞬間を岩倉は見逃さなかった。

“ズバーン！！”

「ストライークッ！」

予定通り初球は見逃す。

羽柴の剛速球・150 Km ストレート。

キャッチャーミットにボールの収まる音が凄まじい。

岩倉は思う。

『田安の言うとおりで…』

そう納得した岩倉だったが、新たなる不安も…

『たとえ田安のおかげで球種がわかって、これほどの球が俺に打てるだろうか…』

続いて2球目。羽柴のモーションが始まる。

岩倉が瞬時に球種を判断する。

——スライダーだっ！

球は真ん中から外角へ逃げるスライダー。これも岩倉は見逃した。判定はボール。カウント1ー1。

これも田安の言う通り。

羽柴は変化球を投げるときには、口が半開き。

ただ、それがスライダーかフォークかを見分けるのには、彼がモーションに入ってからの見極めになる。

そしてそれが完全に確かめられる瞬間が、3球目に訪れた。

——これがフォークか？

ど真ん中からストーンと低めに落ちるフォーク。

3球目も見逃す岩倉。

判定はボール。カウント1ー2。

岩倉は思う。

『ドンピシャだ。よし』

スライダーとフォークの見極めは、ピッチャーの足が上がった瞬間に訪れる。

田安曰く、

「足が上がると同時に両腕の上がる位置を確認するんだ。フォークなら胸の位置。スライダーなら顔の位置まで上がる」

『田安サンキュ。今すげえ役に立ってるぜ』

一方、ピッチャーの羽柴には十分な余裕があった。

『なかなかだな。普通なら三球三振になるところだが…まあよく見たもんだ。というより手が出なかったというべきかな…フッフー』

続いて羽柴の4球目。

——これはストレート！

“ガキッ！”

「ファール！」

外角への力のあるストレート。かろうじてバットに当ててファール。

カウント2―2。

バッターの岩倉は冷静だった。

『打ち返せなくても、ファールで粘ればきっとチャンスがあるはず…』

それが功を奏したのか、5球目のスライダーもカットし、6球目のフォークはバットを振らずに見極めた。

「ボール！」

審判がコールする。カウント2―3。

フォークは大抵、ストライクゾーンから落ちてボールになる。

その見極めができないと大抵空振りしてしまうもの。

補欠・田安の緻密な偵察のおかげで、岩倉が空振りする必要がなくなったことは極めて大きい。

「ボール！フォアボール！」

結局、その後3球ファールで粘った岩倉が、ついに四球で出塁したのである。

青春台高校、ノーアウト1塁。

それでもピッチャー羽柴は、悔しがりもせずに、しきりに感心していた。

『8番バッターのわりに目のいい野郎だ。最後のあがきってやつか。フン（ー、ー）』

いよいよ9回裏が動き始めた。

(続く)

5話 9番レフト・小松敬一（左投げスイッチヒッター）

バッターボックスに立った小松は予め考えていた。球種がわかるのなら、どの球を狙おうかと。

150 Kmのストレートを狙うよりも、ゆるいスライダーの方を選択した小松。

まずは1球目のストレートは見逃した。ストライクでカウント1ー0。

——速い：やはり俺にはストレートは打てそうもない。

羽柴の2球目。彼の口が真一文字。これもたぶんストレート。

バットを一度も振らずにいるのも良くないと思った小松は、狙い球と違うストレートを打ちに行く。

だが、ブーンとバットが空を切った。高めのボールに釣られたのだ。

カウント2ー0。追い込まれる。

「くっそおー！もうちょっと良く見りゃ…」

悔しがる小松。

一方、ピッチャーの羽柴にしてみれば、非力な9番バッターなど眼中にない。

ターゲットは4番の高藤。

だが、彼まで打順をまわすには、ランナーが3人出塁しなければならぬ。

そこで、羽柴には同じチームメイトにも言えない秘密の策があった。

それはわざとコントロールを乱して、四球で満塁にすること。

これはあくまで高藤と勝負するための計画。

こんな勝手な個人プレイをチームメイトが許してくれるはずもない。

だからこれは羽柴自身だけの秘密なのである。

ただ、その計画に最初のミスがあった。

それは先頭バッターだけは必ず打ちとると決めていたにも関わらず、8番・岩倉に予想以上に粘られ、四球を出してしまったこと。

これは芝居ではなく、真面目に攻めた上での出来事。

それでも余裕のある羽柴の気持ちの切り替えは早く、

『この9番をひとひねりすりゃ済むことさ』

と、たかをくくっていたのだった。

『さあいくぜ！3球目のフォークで三振だ！』

羽柴のモーションから球種を察知する小松。

——フォークだ！この高さなら見送ればボール……

予想通り、膝元からストーンと地面に落ちるフォーク。

判定はボール。カウント2—1。

小松は自分に言い聞かせる。

『次の球がスライダーなら、内角に曲がって来る……ということは脇をたたんでコンパクトに打ち返す……もしストレートならカットしよう』

羽柴は、フォークを見逃されて首をかしげた。

『2—0からあの球を見逃せるとは……なぜ空振りしない？』

一抹の疑問を感じながら、マウンド上で次の球のサインを伺う羽柴。

キャッチャーの明智のサインはスライダー。

『よしっ！この球で三振だ。見逃してもコースはストライクさ。フン』

セットポジションに入る羽柴。迎え撃つ小松。

——その頃、青春台高校職員室内では：

誰も観ていないテレビが野球中継を伝えていた。

予選で、しかも10点差の試合となると、たとえ我が校が戦っている試合にせよ、テレビにかじりついて観る教師など誰もいなかったのだ。

各自、銘々のデスクで下調べや採点作業をしている教師たち。

そんな中、突然テレビの中の実況アナウンサーの声が大きく響いた。

実況；打ったああ！一、二塁間、破った破った——！ライト前ヒート——！

教師たちの視線が一斉にテレビに注がれる。

実況…9番・小松の痛烈なライト前ヒット！青春台、ノーアウト一、二塁っ！

「へえ、少しは抵抗してるじゃないか」

と、教師の一人が言う。

「でも10点差だしねえ」

別な教師のその言葉に、まわりも再び、それぞれのデスクワークに目を向けた。

——一方、マウンド上の羽柴は…

「なのであの決め球が打たれるんだ…？信じられん。。」
(続く)

6話 1番セカンド・松平 俊（右投げ左打）

9番の小松がヒットを打ったことで、松平のテンションが俄然高まった。

田安のアドバースに間違いはない。ならば俺にだってできる！

2，3度素振りをしてから左打席に立つ松平。

彼は最初から決めていた。

——俺は初球から狙う！

1番バッターである彼の持ち味は、積極果敢にボールに立ち向かってゆく所。

逆に追い込まれると、一気に消極的になってしまう欠点もある。前回までの打席もそうやって打ちとられた。

——羽柴の初球は必ずストライクから入るはず。しかもストリート。

松平が自信満々にそう考えるにはしつかりした根拠がある。

ピッチャーの羽柴にしてみれば、青春台高校など、所詮格下のチーム。

そんなチームに対して、ボールから探ることなどあり得ない。

まして、予想外にもランナーを二人出してしまう、早くアウトを取りたいはず。

小松はヤツのスライダーをヒットした。

だから俺には絶対、自信のあるストレートを投げてくる。

——羽柴だろうが誰だろうが、同じ年の高校生じゃねえか！
気合いのある方が勝つ！

松平の闘志は1秒ごとに、その激しさを増していった。
羽柴がセットポジションに入る。口元がキュッと締まった。

——よしっ！ズバリストレートだ！

羽柴の手からボールが放たれた。

剛速球が唸りを上げて松平に襲いかかる。

——上から叩くんだ！

自分自身にそう言い聞かせて打ちにいった松平。

“カキーン！”

実況…センター返しー！ピッチャーの足元を抜けたあああ！

「やったぜ！センター前だっ！」

ファーストに走りながら松平の顔に輝きが増す。と、その時。

実況…セカンド今川がベースの後ろで飛びついたー！

「なにぃ！！？」

実況…捕った捕った！そのまま倒れながらショートの大田にトスしてセカンドフォースアウトー！

「俺もヤバイ！」

元より全疾走の松平。

実況…ボールはショートからファーストへ転送ー！

「セーフセーフ！」

ファーストの判定はセーフ。間一髪、松平俊の足が速く、ダブルプレーは免れた。

これで、一死1，3塁。

「くっそお！あれが抜けていれば…」

ベース上で悔しがる松平。

それをなだめる田安。彼は1塁横のコーチボックスで待機していた。

「仕方ないさ。相手は名門・美德館。守備は鍛え抜かれてるんだし」

「それにしてもよお…」

「ナイスバッティングだったよ。見てみる。ピッチャーの羽柴の顔」
「ん？」

羽柴の顔には完全に余裕が消えていた。

勝ち負けの問題ではない。こんな地方予選で無名のチームに打たれたショックの方が大きかったのだ。

「俺のストレートを弾き返しやがった…」

その時、ベンチの土方監督は思った。

「こいつはひよっとすると…イケるかもしれない」

まだ10点差があるにも関わらず、土方にはなぜかそんな予感があるのだった。

（続く）

7話 2番サード・近衛 守（右投げ右打）

胸の鼓動が高鳴っていた。

一死1，3塁。ヒット1本で点が入る大事な場面。

——ヤベエ…ここで俺の番かよ。

近衛守はメンタル面にやや難があった。
このえまもろ

バッティングセンスは決して悪くはない。だから監督も打順を2番に据えた。

ただ極度の緊張症で、こんなチャンスの場合になると、ビビってしまう心の弱さもある。

——参ったなあ…とにかく球種を見極めない…

バッターボックスに入ると同時に、ピッチャー羽柴の顔を睨むように目を凝らす。

別に威嚇するつもりもないのだが、元々彼は近視だからそんな表情をしてしまう。

メガネやコンタクトをするには、ギリギリセーフな視力のため、持っではない。

——これはストレートだな！

羽柴の第1球目をストレートと見極め、打ちに行く近衛。

“ブーン” “ドスン！”

気負い過ぎて大きな空振りをしたあと、尻もちをついて倒れる近

衛。

これには羽柴が思わず吹いた。

『「一*、m」プツ。なんだこの2番は？こんな大振りじゃ俺のストレートにはバットが間に合わないぜ』

カウント1ー0。

近衛はすぐに反省したが弱気の虫は持病で治らない。

『球種がわかったって俺には無理だ…どうすればいい？』

心の定まらないまま、羽柴の第2球が投じられようとしている。そのとき、

『（。○。；）ハッ！そっか。これがあった！俺にはこれしかない』

ピッチャーの口が再び真一文字になる。

——これもストレートか。よしっ！！

羽柴の手からボールが放たれると、近衛はすぐにバントの構えに入る。

そう、彼はセーフティバントを試みようとしたのである。

だがコースは内角の厳しいところ。それでも無理に当てにいく近衛。

“カッ！” ビシッ！

「ぐあああああ！！」

バントは失敗した。

羽柴の内角をえぐるストレートは、剛速球ゆえにナチュラルシュートする。

バットの根本に当たって跳ね返ったボールが、近衛のふくらはぎに直撃してしまった。いわゆる自打球。

足に電気が走ったような激痛。ケンケンしたままバッターボックスを離れたが、そのまま倒れ込んで、のた打ちまわる近衛。

タイムがかかり、ベンチから走って出て来た田安と、そばにいたネクストバッターの木戸が、手当のために近衛を抱えてベンチに戻る。

試合中断のアナウンスが流れる中、突然ベンチ上の観客席から声が掛けられた。

「守っ！頑張っ！これが最後の打席かもしれないんだよ！悔いは残さないで！」

その声は近衛の彼女、メグミだった。

「守っ！ここで打ったらアタシ、キスしてあげるっ！キャ（／＼）言っちゃった」

——（ノ。o。）ノオオオオオオオオオオ——

と叫んだのは守ではなく、まわりのチームメイト全員。

「おい、こりゃ打たなきゃ近衛。」

「てか、まだキスもしてなかったのか？」

「彼女があそこまで言っただんだしなあ」

顔が真赤になった近衛。

「いいじゃん別に…」

そう、この試合の前日、彼はメグミとケンカをしていた。

「明日の試合頑張っ！勝ったらすごいことになるよ」

近衛はため息ひとつ。

「美徳館になんて勝てるわけないじゃん。みんな全国から集まった

特待生軍団だぞ」

「やってみなきゃわかんないでしょ！」

「（；ー―） Ⅱ3 フウ：メグは野球を知らないからそんなことと言えるんだ」

ムツとしたメグミ。

「最初からやる気ないんなら出なきゃいいでしょ！」

「試合を棄権するわけにはいかないからなあ」

「もうっ！守はいつもそう。“どうせ俺は”って口癖なんだもん。アタシ、守のそんなこと大っ嫌い！」

「ドラマの世界じゃないんだ。現実には実力の差を考えると結果は見えてる」

「転校して来た高藤君がいるじゃない。それなのにもっと互角に戦えないの？」

「あんなあ、野球はあいつ一人じゃできないんだよ。それにあいつはバッターだし、うちのピッチャーが打たれまくったらそれで負けが決まるのさ」

「・・・」

しばらく無言のメグミ。近衛を見る目が悲しそうだった。

「じゃあアタシ、明日は球場には行かない。どうせ打てないんでしょ」

「・・・」

今度は近衛が言葉を返せないで無言状態に。

こうして二人は気まずいまま別れて、今日のこの瞬間を迎えたのである。

『メグ：来てくれたんだ。俺は昨日、あんな不甲斐ないこと言ったのに：軽蔑されてもおかしくないことも言ったのに：』

これを機に、メンタル面に左右されやすい近衛の心理に明らかな変化があった。

はつきり言って単純とも言える。

「俺、足に冷却スプレーかけたら打席に戻るわ」

近衛のこの言葉を、誰も否定する者はいなかった。

“無理するな”などという下手な気遣いの言葉など、単なる体裁に過ぎないことだと皆知ってたからである。

「俺は打つー！」

近衛にとって、今が最高に活力の湧き出ている瞬間でもあった。足を若干、引きづりながらバッターボックスに入る近衛。

一方、職員室ではちょうど6時限目の授業を終えて戻って来た体育教師・小栗先生が、テレビの前を通りかかった。

実況…打ったーっ！1塁線破った破ったーっ！

「お、うちの野球部だ」

実況…3塁ランナーホームイン！1塁ランナーも3塁へーっ！

「ホホウ（。・。＊）反撃してるのか」

実況…打った近衛は2塁に達してツーベースヒット！

「おお、うちのクラスの近衛か。ノミの心臓あいつがここで打ったとはすごいな」

だが、小栗先生はテレビ画面のスコアボードに気づいてズッコケた。

「なんだよ。1点返してもまだ9点差あるのか…」
（続く）（一）；

8話 3番センター・木戸晴信（右投げ右打）

／／／	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
美徳館	0	3	2	0	2	0	0	3	4	14
青春台	0	0	0	0	1	0	0	3	1	5

9回裏、1点を取って攻撃中。その差9点。

気の強い3番バッター木戸の闘志はメラメラと燃え盛っていた。
しかも彼は大の目立ちたがり屋。

あの有名なピッチャー羽柴からヒットを打てば…そしてそれが長打なら…

木戸の頭の中では、すでにイメージが完成していた。

その時は声を張り上げて大きなガッツポーズをし、バク転しながらホームインする。

とにかく派手なパフォーマンスで観客の注目を浴びたい。

羽柴のようにマスコミに取り上げられるのがうらやましくて仕方ない。

ルックスでは自分が1枚も2枚も羽柴より上だと勝手に思っている自信過剰な木戸。

——ようし！やってやるー！

そう思うと、武者震いさえしてくるのだった。

いつも自分に都合よく考えるプラス思考の木戸。

適度な緊張がなおさら集中力を高めてくれるもの。木戸は常々そう思っていた。

そしてその状態がまさに今、この瞬間なのだ。

——小松も近衛も打ったんだ。俺に打てないはずはない！

現状は1死2，3塁。この場面で羽柴からヒットを打てば確実に目立つし、チームも盛り上がる。

そんな気持ちになれるのも、9点という大差のせいかもしれない。逆にこれが1点差なら、さすがの木戸もプレッシャーに押し潰されて、ガチガチになっただろう。

——球種はわかってるんだ。あとはどのコースに来るか…

バッターボックスに立って羽柴を見つめる木戸。
ふと余計なことが頭に浮かぶ。

——やっぱり俺の方が顔がイイぜ。

そう思ったところで立場も注目度も向こうが上。まずは打たなければ意味がない。

羽柴がセカンドにけん制球を投げる。

リードの大きいセカンドランナーの近衛が気になったようだ。

戻りのうまい近衛はもちろんセーフ。彼はけん制で刺されたことは一度もない。

少し間合いが空いたので、ボックスを外すして2，3度スイングする木戸。

そのときふと浮かんだ思いつき。

——そうか！俺の好きなコースに投げさせればいいんだ！

マウンド上の羽柴はバッターの木戸を見て「（・―・）ン？」と首をかしげた。

「なんだ？あの3番は？」

と、思わず呟いてしまったその理由。

それは木戸がバットを長く持って、バッターボックスの内側ギリギリに、しかも1番手前に立ったからだ。体もベースに覆いかぶさっている。

「はあ、なるほど：俺のスライダー狙いか」

羽柴がそう判断したわけ。ボックスの手前内側に立てば、外角にも余裕でバットが届き、外に逃げてゆくスライダーの曲がりっぱなをとらえることができるからだ。

「ならばここはインコースにストレートといきたいところだが：」

羽柴には若干腑に落ちない部分もあった。

普通こんなバレバレで白々しいことをするもんだろうかと。

スライダー狙いと見せかけて、本当はストレートを待っているのではないかと。

案の定、この思いはキャッチャーの明智も一緒だった。彼のサインはスライダー。

いわゆる逆の逆を行く作戦。

「よし、わかった！俺も同じ意見だ」

1球目のモーションに入る羽柴。球種を見極める木戸。

実況…ピッチャー第1球投げました！

“カーン！！”

実況…強烈な当たりーっ！でも1塁線切れたー！ファールファールファール！！

カウント1ー0.

「あぶねえあぶねえ（^|へ;）」
一瞬ヒヤツとした羽柴。やはり素直に考えれば良かったと反省する。

バッター木戸は次も同じ構え。

——あの位置と構えでは、俺のストレートにバットが間に合うはずがない！たえストレート狙いだとしても！！

キャッチャーの明智とも意思疎通した。羽柴の口が真一文字に締まる。

木戸の目が輝いた。

——これでストレートが来る！インコースにつ！

渾身の力を込めた羽柴の2球目が彼の手から放れた。

同時に、木戸は長く持ったバットの握りを緩める。

当然バットは引力の法則で真下にズリ落ちる。彼は10センチほど落ちたところで再び強くバットをギュッと握りしめ、足のスタンスをオーブンに開いた。

——これだっ！！

歯を食いしばって打ちに行く木戸。しなるバット。

“カッキイイイイン！！”

実況…打ったあああ！打球は左中間ー！

「よしっ！」

走りながら木戸はヒットの確信を得る。

実況…レフトとセンターの間を真つ二つううー!! 3塁ランナーと2塁ランナー相次いでホームイン! 打った木戸は3塁へー! スリーベースヒーヒット!!

余裕でセーフなのに、サードへヘッドスライディングをして、雄たけびを上げながらガッツポーズをする木戸。

「うおおおおお!! やったぜええいっ!」

にわかに活気づく場内。それもそのはず。誰しも思った完全な負け試合。

なのに一流エースを打ちこみ、2点追加で14ー7。点差が縮まり尚も一死3塁。

そしてついに、ネクストバッターには4番・高藤雄一を迎えるのである。

ピッチャーの羽柴にしてみれば、高藤との対決を希望して立ったマウンド。

そのためには、故意に制球を乱し、ランナーをためてから彼と勝負し、そしてライバルを打ちとる計算が成り立っていた。

だが予想に反して、これまでまだ一死しかとれず、自分が高藤以外の選手に打ちこまれている現状にショックを隠せなかった。

——奴に勝つには、コントロール1ミリの狂いも許されない。

でもやってやる! こいつさえ抑えればこのチームの精神力は切れる!

(続く)

9話 4番ファースト・高藤雄一（右投げ左打）

／／／	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
美徳館	0	3	2	0	2	0	0	3	4	14
青春台	0	0	0	0	1	0	0	3	3	7

9回裏、青春台高校の攻撃中。

プロも注目するほどの剛腕ピッチャー羽柴。

その彼が、地区予選の3回戦程度でリリーフ登板している。相手は来年の廃校が決定している無名の青春台高校だということ。しかもこのチームは、過去の地区予選も3回戦まで進めばいいところ。

負けるときはいつもコールド。普通ならどう考えても楽勝のはず。

だが、今年の夏に限って言えば、それは違っていた。

去年の甲子園大会で名を馳せた全国屈指のスラッガー・高藤雄一が、なぜかこの弱小高校に転校していて4番を打っている。

プライドの高い羽柴にとっては願ってもない対決のチャンスが訪れたのである。

だが、こんな予想外な展開になるとは誰か思っただろうか？

監督に直訴して、9回から登板した羽柴。なのに、通常ではあり得ない反撃にあっている。高藤どころか他の選手に打ちこまれている始末。

揺らぎ始める羽柴の精神力。

一方、高藤はこの打席に対する自分の役割を心に徹底していた。ここは絶対に繋いでいかなければならないと。

高校生活最後の夏。これが最後の打席になるかもしれないと思う

と、色々感慨深いものが込み上げて来る。

彼は今このとき、この瞬間、この打席に立っていることを、控え選手の田安に心から感謝していた。

そう、高藤はある事情により、野球からきっぱり身を引いていたのである。

そしてその意志は固かった。

そんな彼を、田安は自分のレギュラーを譲ってまで、必死に高藤を説得した。

田安だって3年生。最後の夏なのだ。自分を犠牲にする必要はない。

転校して来たばかりの頃、勧誘しに来た田安に高藤はハッキリと言った。

「ごめん。俺、野球やめたんだ」

「えっ？何でだよ？君はプロにもなれる素質がある人じゃないか！」

「そんなことないさ。見かけ倒しだよ」

「わかんないなあ…どうせあと4か月もすりゃ、俺たち3年は部を卒業するんだ」

「だろうね」

「この学校も来年で終わる。あとちょっとだけじゃないか！それなのになんでだよ？」

「いろいろあってね。悪いけどこれ以上は言いたくない」

「頼むよ。ラストイヤーの今年はメンバーも燃えてるんだ。君が入部したらきつと活気が出るし、チームの勢いもつく！」

「よそ者が入ったらチームワークを乱す原因になるさ」

「そんなことないって。うちにはそんな陰湿な人間はいないよ」

「君はその…名前何ていうんだ？」

「俺は田安」

「田安君。悪いけど、諦めてくれ。今の俺は野球する気は全くないんだ」

「どこか持病でもあるのか？それとも誰にも言えないケガでもしてるのか？」

数秒の間があった。そして思わずポロツと高藤の口から出た一言。「ケガなんかしてない…ケガをさせてしまったんだ。」

「えっ？」

「もういいだろ。じゃあな」

こうしてこの場は終わったが、このあと来る日も来る日も田安は高藤を尋ねて来ては熱心に説得した。

彼の首を縦に振らすのは容易なことではなかった。

彼の母親の力も借り、口を閉ざしていたデリケートな問題にも、田安は親身になって協力した。

その甲斐あってか、決意の固い高藤もついに心を揺り動かされ、再びバットを握るようになったのだ。

——あのとき…あそこまでしてくれたあいつの熱意。もしそれがなかったら…

キュツと唇をかみしめる高藤。気合と集中力が更に高まってゆく。バッテリーボックスで足場を馴らしながらゆっくりとバットを構える。

——田安がいなかったら今の俺はここにいない。とんだおせっかい野郎なのに、あいつは…あいつはあの子の気持ちまでも動かしてくれた。。

高藤はバッテリーボックスからチラツと田安を見ると、バッテリー目が合った。

すると、いきなり高藤に向かってヘン顔をする田安。思わず吹き

出しそうになるほどのひよつと顔。

——わかってるって田安。そんなにもう気を遣うなよ。

高藤は感じていた。田安はああすることで、緊張をほぐしてくれているんだと。

キメの細かい性格というか、感心するほどの人の良さを痛感させる男。それが田安。

——あいつは補欠でも、指導者としては素質があるかもしれない。

羽柴がセツトポジションに入った。

バットを立てて構える高藤。

帰りかけていた取材の新聞社や雑誌のカメラマンも一斉に身構える。

地区予選での一流対決はめったに見られるものではないからだ。そんな渦中の高藤の心中は、デカイ一発を狙う気など更々なかった。

——ホームラン狙いではダメだ。ランナーが消えては反撃ムードもなくなる。

彼はチームバッティングに徹しようと決意したのだ。つまりシングルヒット狙い。

ランナーを溜めた形で盛り上がりを持続させ、後続の集中連打を期待したのだ。

そんな高藤を、バックネット裏の目立たない席から観戦している一人の少女。

彼女は帽子を目深にかぶり、サングラスをしている。
そしてボックスの高藤を切なる思いで見つめていた。

“カーン！！”

実況…打ったああー！ゴロでセンターに抜けるクリーンヒットー
っ！3塁ランナーホームイーン！またまた1点追加ああー！

羽柴の初球のスライダーに逆らわず、確実にミートを心掛けたバ
ッティング。

得点は14ー8。一死ランナー1塁。

ピッチャー羽柴は内心ガッカリしていた。

打たれたショックではなくて、力と力の勝負をしたかったのが彼
の希望。

だが高藤は小さく当てに来るバッティング。

彼が思いきりスイングし、それを自分が三振にとるのが目的だっ
たからだ。

「高藤め。お前の高校生活最後の打席は、そんなに良かったのか
…？」

（続く）

10話 5番ライト・大久保吾朗（左投げ左打）

／／／	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
美徳館	0	3	2	0	2	0	0	3	4	14
青春台	0	0	0	0	1	0	0	3	4	8

青春台高校職員室では、高藤のヒットでにわかに活気が出て来ていた。

それまでは、高校野球中継など、どの教師も無関心。テレビの視聴どころか、耳障りだから誰か消してほしいとさえ思っていたほど。

だが、徐々に高まる実況アナウンサーのテンションが気になり始め、教師全員がテレビに視線を移すようになっていた。

我が校はこの最終回到4点取って攻撃中の試合展開。

「すごいな。甲子園に出た羽柴から4点取ってるなんて」

「ああ、打てるのは高藤くらいしかないと思ってたけどな」

「高藤はなぜこの最後の打席だけ、小さくまとまったバッティングをしたんだろう？ホームランを狙った方が良かったのに」

それを聞いた体育教師の小栗先生が、高藤の気持ちを代弁する。

「いや、あいつはランナーを残して5番に繋げようとしたんですよ」

一同、ホホウ（。・。・＊）とした顔で小栗先生を見た。

彼は更に説明する。

「高藤がホームランでも打てば、ランナーが一掃されていなくなってしまうからです」

「なるほど…それよりもシングルヒットの方が、常にチャンスは途切れていない」

「そのとおりです！」

「でも問題はここからだよな。5番の大久保が打てるかどうか…」

「チャンスはあります。高校生は精神力が実力を上回るときが必ずあるんです」

「小栗先生はそれが今だと？」

「ええ。何か画面から彼らのオーラみたいなものを感じます。じゃないとこんな猛反撃なんてできませんよ」

「うむ…」

“ズバーン！”

「ボールッ！」

カウント1ー3。5番バッターの大久保はじつくりと球を見極めていた。

彼は体格的には大柄だが、少し神経質っぽいところもある。

そのせいか、わりと縁起を担ぐタイプで、毎日の占いを信じ、その日の運勢が良いとテンションが上がり、悪いと凹む。

今日の朝の情報番組の占いコーナーでは、自分の星座の運勢は4位だった。

良いのか悪いのかビミョーな順位。

そこで大切なのはラッキーアイテム。今日のおとめ座は黒ゴマ。大久保はしっかりとポケットにそれを忍ばせていた。

だがここまでの3打席は全て凡退。普通なら効き目のないラッキーアイテムに不信感を抱くのも当然。

なのに彼は、そろそろ効き目があっても良さそうな頃だと信じて止まないのである。

それでもこの打席に立つ少し前、一抹の不安を感じた大久保。ベンチでズボンのポケットから黒ゴマを取り出して仰天した。

「Σ―11（▽；）―1ええっ？これは白ゴマじゃないかあ

あっ！」

そう。彼は今朝、黒ゴマの準備を母親に頼んだのだった。

「吾朗、ポケットにゴマ入れといたからねー」

「さんきゅ。母ちゃん」

自分自身は出かけると支度に追われ、母親に任せきりだったのが災いしていた。

ナインたちは大久保の叫びに驚いて振り返る。

「そっか：そう言えば俺、母ちゃんに“ゴマ”としか言わなかった
：」

ため息について意気消沈してしまった大久保。

「そうか、だから打てなかったのか：」

「いや、そればかりじゃないと思うぞ？（^| ^;）」と土方監督。

苦笑いするナインたち。でもそれは長年の付き合い。彼の性格は全員承知の上。

縁起を担ぐ大久保の性格を小バカにはしない。それどころか、

「誰か黒ゴマ持ってるやつはいないか？」と協力まで惜しまない。

「ちよっとなあ：黒ゴマは普通持って歩かないしなあ」

「さすがにいねえんじゃないの？」

と、諦めムード。そんな中、田安がにっこり笑いながら言う。

「俺、持ってるから少し分けてやるよ」

これには一同驚愕。

ええええ（。○。；）ええええ！？

おおおお！w（＊。o。＊）w

な、なんとっ！Σ（□；

「実は俺もおとめ座なんだ。うちの母親が持ってけっけっけうるさくて

さ。」

そう言って、田安は自分のポケットから小さなビニール袋に入った黒ゴマを開けて、大久保に取り分ける。

一気にテンションがウソのように上がる大久保。

「ゴロー、これで戦えるな！」

「おっしや！羽柴がなんでえ！美德館がなんでえ！」

急な変わりようにまたまたナインも苦笑いするしかない（－）；

こうして迎えたこの打席。

”カキッ！！“ガシャーン！”

「ファールっ！」

カウント2－3。粘る大久保。すでに羽柴は彼に8球も投げている。

球種のクセがわからなければ、とつくに三振している。

——どんな形でも絶対塁に出てやる！

彼は更に3球もファールで粘った。

ストレートやスライダー、フォークまでもバットに当てて食い下がる。

その甲斐あって、

「フォアボール！」

羽柴のストレートが高めに大きく外れた。

大久保はついに四球を選んで出塁したのである。

一死、ランナー1・2塁。

「やったああ！やったぜ！黒ゴマ効果はすげえ！」
打ったわけではないのに、四球で大喜びの大久保。
逆に悔しさを噛みしめる羽柴。
「ちくしょう…なんだよ黒ゴマって？」

美徳館学園のベンチにいる前田部長は、蜂須賀監督に進言した。

「監督。ここはタイムをとった方がいいのでは？」

「うむ…だがまだ6点差あるし、逆転はあり得まい」

「でも…」

「羽柴が乗り越える試練でもある。あと1本ヒットを打たれたらタイムをかける」

「…わかりました」

（続く）

11話 6番キャッチャー・高杉辰巳（右投げ右打）

「よしっ！来いやっ！」

気合一発、バッターボックスの高杉は、ピッチャーの羽柴を睨んだ。

徐々に高まる押せ押せムード。高潮する高杉の頬。

彼自身、前の8回裏が自分の最後の打席だと思っていた。

その前打席も打ちとられ、ついに俺の夏も終わったと感じていたのが正直なところ。

それがこうして、チームの反撃によりもう一度チャンスがめぐって来たのである。

しかもこの9回に羽柴との対決。いやがおうにも力が入る。

——これは天がくれたチャンスかもしれない。屈辱を晴らすため……

信心深い高杉はそう思った。

というのも、彼と羽柴は出身中学が同じで共に野球部に所属。一応チームメイトでもあったのだ。

だが、同級生でありながら、当時の立場は全くの天と地の差。

羽柴はズバ抜けた才能を持つエースで、すでに特待生として進学が決まっていた。

一方、高杉は補欠のキャッチャーで、試合経験もほとんどない。たまに羽柴の投球練習に付き合う程度だった。

そんな二人がこの試合の始まる前、球場内のトイレでばったり出くわすことに。

先に声をかけたのが高杉から。

「よお、羽柴久しぶり」

小便をしながら振り向いた羽柴が「はあ？」というような高杉の顔を見る。

「んゝごめん。思い出せない。誰だっけ？」

少し憤慨したが、まだ平気なレベル。

「ほら、中学んとき、お前の球捕ったこともある…」

「あゝ、はいはい。お前、あの時の補欠か。名前は…そう、なんとか杉」

「高杉だ（ ー、 ； 」

「そうそう、その杉。え？ひょっとしてお前は今日の対戦相手？」

「ああ。よろしく頼むな」

「なんだ。そうだったのか。でもお前、試合出れるのか？」

「俺は青春台の正捕手だからな」

「へえー、補欠のキャッチャーでも青春台に行けば、レギュラーになれるんだ」

この一言にカチンときた高杉。だが彼はその怒りを黙って胸にしまった。

「今日は先発じゃないのか？」と話題をそらして尋ねる高杉。

「知ってるだろ。俺が投げるのは準決勝あたりからさ。今日は2年の北条に肩慣らしさせるって監督も言ってたし」

自信過剰なのは羽柴だけじゃなく、美德館の蜂須賀監督もそうだった。

共に用を足した二人は手を洗ってトイレを出た。

別れ際に羽柴が口に手を当て、小声で高杉につぶやいた。

「あのさ、俺な、いっぺん高藤と勝負してみたかったんだわ。だからうちの監督に直訴して後半リリーフするかもしれんわ」

「なんだよそれ？へへ；」

「高藤を三振に切って取れば、俺の株もグンと更に上がるっちゅうもんじゃねえか」

「・・・」

「ああ、ついでに万が一、お前と対決するときがあったとしたら、ひとつ約束してやるわ」

「ついでに約束かよ」

「まあまあ。とにかく俺はストレートしか投げない」

「絶対だな？絶対ストレートだぞ！」

「俺は弱い者いじめは嫌いなんだ。お前に変化球投げていじめたりしないさ。ハハハ」

そしてこうして今、羽柴と高杉の対決が現実のものになっている。
この打席に怒りも含めた全神経を向ける高杉。

実況…ピッチャー第1球投げました！外角に流れるスライダー！

「ストライーク！！」

カウント1ー0.

高杉はすかさずマウンド上の羽柴に大声で一言。

「このウソつき野郎！」

この言葉に主審が高杉に警告する。

「君っ、相手を挑発する言動は慎むように！」

すぐに帽子を取って審判に詫びる高杉。

だが羽柴に対しては、再び睨み返していた。

——これでストレートが来る。さっき木戸にインコースを打たれたから、俺には外角で勝負するはず…

と、コースの大ヤマを張った高杉。

一方、まだかろうじて強気の羽柴。

——この補欠に俺のストレートが打てるはずがないっ！

羽柴が渾身の力で2球目を投げる。

コースは高杉の狙いにドンピシャの外角へ。

——きたっ！

“カキイイイン”

実況…流し打ちいいー！ライン際ファーストが飛びついたー！
ヒットを確信した高杉。

実況…捕れない捕れなー！抜けたーっ！

「よっしゃああ！」

雄たけびと共に全力疾走の高杉。

実況…打球はライト線を転々！セカンドランナー高藤、3塁をまわ
ってホームイン！ファーストランナー大久保はサードストップ！打
ったバッター高杉は2塁へー！

球場内が歓声とどよめきでこれまでにない盛り上がりを見せてい
た。

この回5点目。得点14対9。ランナーは尚も一死2，3塁。

（続く）

12話 7番ピッチャー・一橋進（右投げ右打）

／／／	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
美徳館	0	3	2	0	2	0	0	3	4	14
青春台	0	0	0	0	1	0	0	3	5	9

バッティングには自信のない一橋。ひつぱし

でもここは何として自分の責任を果たしたい一心だった。

——くそお：せめて俺が9回表に4点も取られなければ、今頃は1点差だったのに：

一橋は自分の不甲斐なさに悔しさをにじませていた。

にも関わらず、ナインは誰も彼を責めたりはしなかった。逆にねぎらいの言葉のオンパレード。

「一橋、よくやった！よくここまで投げた」

「あの美徳館相手に14点でよく抑えたぞ」

「228球の粘投おつかれ。いいピッチングだったぞ」

「よく最後まで一人で投げた。お前は最高だ！」

こんな言葉をかけられて、感動のあまり声が詰まった一橋。

「みんな：すまん。こんなに点を取られて：それなのに本当にありがとな」

打席に入る一橋。チームメイトのために是が非でも貢献したい。

自分が取られた点は自分で1点でも取り返したい。

ここはまさにそんな場面なのだ。

——打てない俺にできること…

タイミングよく、美德館がタイムを取っていた。
ピッチャー羽柴にベンチから伝令が走る。

この間、一橋は考えた。打てないならそれなりに策はあるはず…

——相手のピッチャーは点を取られて焦っている。つけ入るスキは必ずある！

タイムが解け、

改めてバッターボックスに入る一橋。

彼がとった行動。それは大胆にもバッターボックスから身を乗り出し、ベースに覆いかぶさるようにバットを構えた。

顔をしかめるピッチャー羽柴。

「ふざけたマネしやがって…あれで俺に内角をつかせようとしてるつもりなのか」

羽柴はキャッチャー明智がどう考えているのか、次のサインを覗き込む。

——ん？外角低目に落ちるフォークか…なるほどな。俺と同じだ。

外角を狙ってるようなフリをして、実は内角を待っているという明智の読み。

それでもしその読みが外れていたとしても、フォークなら打ち返すことは難しい。

羽柴はサインに大きく頷いた。

実況…ピッチャー第1球投げました！

バッターの一橋は羽柴のモーションからフォークだと判断。空振りするとわかっていても、打ちにいくと決めていた一橋。それもこれも外角を待っていたと思わせるためだ。

ボールは一橋のベルト付近の高さから、すごい角度でストーンと落ちる。

それは彼の予測よりはるかに角度のついた鋭いフォーク。バットにかすりもせずに空振りする一橋。

だが、そこに意外な幸運が待っていた。

実況…あああああ〜！ボールがワンバウンドしてミットを弾いたああああ〜！

「やったー！！来い来い来い来い！！」

大声で3塁ランナーに突っ込む合図をする一橋。

ボールはネット裏に転々…

実況…ワイルドピッチで3塁ランナーが返って来たああ！！2塁ランナーも3塁ヘー！！

この回6点目。得点14ー10。その差4点。

場内はかなりの盛り上がりを見せていた。

観客ほぼ全員が、青春台高校の猛反撃を後押しするように、ワンプレイごとに大拍手する。

羽柴の焦りは目に見えてわかるようになっていた。にわかに余裕を見せている顔も芝居じみていて不自然に思えるほど。

「やべえ…ちよつと今は球が低すぎたか…ハハ（ハハッ）」

一方、再度ベースに覆いかぶさるように構える一橋。彼の心は決

まっていた。

おそらく羽柴はもう変化球は投げないだろう。それなら次が一か八かのチャンス…

2球目のモーション。羽柴の口がキュッと締まる。

——よしっ！ストレートだ。間違いなく内角に来る！

羽柴は思っていた。あんな態勢から自分のバッティングができるはずないと。

1球、内角攻めで体をのけ反らせてから、外角の変化球で仕留めようと。

羽柴の手からボールが放れた。まさに内角の厳しいコース！

「あ、あぶないっ！」

と、思わず心で叫んだ羽柴。

だがその叫びとはウラハラに、一橋はその球を打ちに行く。

“ボスッ！！”

「う！」

デッドボール…

内角への剛速球が一橋の脇腹にめり込み、彼はその場に倒れた。打ちに行く態勢だったため、球を避けきれなかったのだ。

「ううう…」

「君っ、大丈夫かっ？起きれるか？」

主審が一橋に話しかける。

一瞬、彼は呼吸につまったが、なんとか痛みをこらえながらも返事を返す。

「は…はい。。なんとか…」

その後、ゆっくり起き上がり、場内の拍手に迎えられて1塁に歩いた。

「ナイスファイト!!」

一般席からの掛声もかかる。

ピッチャーの羽柴はここでハッと気づいた。

——そうか！こいつは最初からデッドボールを狙ってたのか…

1塁上の一橋は、自分の脇腹をさすりながらも心の中ではガッツポーズをしていた。

——よし！やったぞ！かなり痛い思いをしたけどうまくいった…

体を張った一橋のこのプレイが、青春台のナインの士気を一段と高めた。

(続く)

13話 弁当屋の意地・岩倉

／／／	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
美徳館	0	3	2	0	2	0	0	3	4	14
青春台	0	0	0	0	1	0	0	3	6	10

9回裏、怒濤の攻撃。

10点という大差から、4点差まで詰め寄った青春台高校。更に一死1，3塁にランナーが二人。

打者はついに一巡して、8番の岩倉がこの回二度目のバッターボックスに入る。

前打席は粘りに粘って選んだフォアボール。これが猛反撃のきっかけを作った。

岩倉貴雄が予想だになかった自分の打席。

まさかもう1回巡って来るとは正直思わなかった。しかもここは大事な局面。

前の打席の心構えとは全然違い、緊張感が体中を駆け巡る。

前回は開き直りの打席。いわゆるダメ元で挑戦したハングリー精神だった。

しかし、こうして点差が縮まった今、自分のバッティング次第で勝敗にも影響が及ぼすとなると、緊張せざるを得なかったのである。

——俺の高校生活最後の打席かもしれない。野球ともこれでオサラバ。最後に悔いのないバッティングをしなければ……

一人っ子の岩倉は学校卒業後、実家の弁当屋を担うことに決まっている。

両親二人だけで切り盛りしている弁当屋は、他に人手がないだけ

に重労働。

おまけに父親は腱鞘炎。母親も最近になってわかったメニエール病。

店を存続するためにも、彼の卒業後の選択肢はひとつしかなかった。

また、貴雄自身もそれは充分承知している。

親思いの貴雄は、今朝も4時から仕事の手伝い。試合当日だろうが関係ない。

だが、今日はいつもと少し勝手が違っていた。

貴雄が起きて仕事場に顔を出したときには、すでに両親が仕事の仕込みを半分以上終わらせていたのである。

不思議に思った貴雄だが、起床まもないせいもあって、頭もフル回転していない。

無言のまま、数百個分はある弁当箱の中に、おかずの盛り付け作業に取り掛かる。

1時間ほど経つと、父親が不意に貴雄にこう言った。

「貴雄、おまえはもういい。ここまで仕上がったらもう大丈夫だ。もう少し寝てろ」

今まで言われたことのないセリフに驚く貴雄。

「本当にいいのか？」

「お前、今日は大事な試合だろ？」

「…まあそうだけど、たぶん負けるよ」

「わかってる。相手が美徳館じゃ無理もない。だからこそ、今日が最後の試合になるかもしれないだろうが」

「…うん」

「行く時間になるまで体を休めておけ」

母親も父の横から微笑みながら大きく頷いている。

貴雄はハッと気がついた。今朝自分が起きて仕事場に来たとき、なぜこんなに準備が先に進んでいたのかを。

全ては自分を試合に集中させるため。作業をなるべくさせないため。

段取りの進み具合から予想すると、両親はおそらく午前2時にはすでに作業を始めていたと思われる。

貴雄は胸が熱くなった。そして誓った。

たとえ、負け試合でも気を抜くことなく、最後まで全力で戦うと。

——ズバーン!!

「ボールッ!」

カウント2ー2。きわどいコースを冷静に見送った岩倉貴雄。バットのグリップを握り直して大きく息を吸い込んだ。

——父さん、母さん。俺、絶対に打つから!!

弁当屋の作業場に置かれている小さなワンセグケータイ。

画面を観る余裕はないものの、仕事に追われながらも耳を傾けている両親がいた。

追い込まれたカウントに、作業の手も思わず止まってしまう二人。

「貴雄。。。」

——ガキッ!!

実況…当たりそこねだが高いバウンドー!これはおもしろい!

内角のストレートに詰まった打球。

ワンバウンドして高く跳ね上がったボールはサード前へ。

実況…サード前進前進！

懸命に突っ込むサード。

実況…サードがツーバウンド目に捕った捕った！そのままファーストへ送球ーっ！きわどいタイミングだーっ！」

ゴクっと生つばを吞む岩倉両親。

実況…塁審の判定はーっ？セーフだセーフだーっ！

「よしっ！でかした貴雄！よくやった！」

ワンセグケータイの前でガッツポーズの父。胸をなで下ろす母。

実況…岩倉のタイムリー内野安打っ！なんとこの回7点目。14対11の3点差！！

収まらないどよめきと大盛り上がりの球場内。それは青春台高校内でも同じだった。

すでに教員たちは職員室から大画面テレビが設置されている会議室へ移動。

噂を聞きつけた他の部活の生徒も加わり、テレビの前で興奮のるつぼと化していた。

（続く）

14話 予想外の投手交代

／／／	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
美徳館	0	3	2	0	2	0	0	3	4	14
青春台	0	0	0	0	1	0	0	3	7	11

9番の小松敬一に緊張が走る。

それはチャンスに打順が回って来た緊張とは訳が違っていた。

理由はピッチャー交代。

美徳館学園の蜂須賀監督は、なんとあの羽柴をマウンドから降ろしたのだ。

ベンチから3番手のピッチャー・石山が現れ、駆け足でマウンドへ上がる。

羽柴はライトへまわり、ライトの毛利がベンチに下がった。

スイッチヒッター小松の前打席は羽柴から痛烈なヒットを打っている。

だがそれは、羽柴の投球のクセを知っていたからできたこと。

この3番手のピッチャーについては何の情報もない。

石山は右腕のスリークォーター型ピッチャー。

投球練習を見ているとそれなりに威力のあるボールを投げている。

羽柴の150Kmの剛速球に比べれば、スピードでは明らかに劣るが、そう簡単に打てる球でもなさそうだ。

球種が何もわからない以上、この状況でヒットを打つのは極めて厳しいと言える。

“ズバーン！”

「ストライーク！！」

声高らかにコールする主審。1球様子を見た左打席の小松。球は外角低目ギリギリのストレート。コントロールはいいようだ。大きく深呼吸をして打席に入り直す小松。

——甘い球さえ来ればなんとかできるのに…

小松は2球目も速いストレートにタイミングを合わせた。だが、予想もしないドロ〜ンと曲がる超スローカーブにバットが1ミリも出ない。

“スポン！”

「ストライクツー！！」

見事にタイミングを外されて追い込まれた小松。カウント2ー0。次はどんな球にも対処できるようにバットを出さなければならぬ。い。

ギラギラと夏の太陽が照りつけているグラウンド内。

猛暑のはずなのに、背すじが凍るほどの寒さを感じる小松。更に高まる緊張。

それでも3球目のつり球には引っ掛からずに冷静に対処できた。カウント2ー1。

そしておそろく勝負の4球目。

実況…ピッチャー石山、セットポジションから第4球投げましたっ！

コースはやや真ん中のストレート。

——しめたっ！あまい球だっ！

チャンスとばかりに打ちに行く小松。ところが――

「なにっ…」

ストレートに思えたボールが直前で真横にスライドしたのだ。

「まずいっ…」

しかしバットのスイングはもう止まらない。

“ガキン！”

バットの根っこ側に当たった鈍い音。

実況…ボテボテのショートゴローっ！ダブルプレーコースだ！

「しまったーっ！」

全力で1塁へ走りながら悔やしがる小松。

実況…ショートが捕ってセカンドへ送球！それをセカンドが捕って素早くファーストへ転送ーっ！アウトなら試合終了だーっ？！

小松は1塁に執念のヘッドスライディング。

ファースト塁審の判定はいかに…

「アウトーッ！」

実況…アウトだアウトだーっ！青春台高校の怒涛の反撃もついに力尽きたーっ！

「ああーあ…」

一瞬の出来事に青春台ベンチも啞然。スタンド全体からも大きな溜め息が洩れる。

「負けたあ…」

「もう1歩だったのに…」

「はああ、惜しかったなあ…」

ガックリ肩を落とす青春台ナイン。

一方、対象的に喜び勇んで試合終了の挨拶のためにホームベース
前まで駆け足の石山と内野陣。

しかしここで思わぬことが起きた。

「タイムーっ！」

突然の大きな声。何事かと誰もが声の方向に振り向いた。

（続く）

15話 攻撃の波、守備のリズム

タイムをかけたのはセカンドの塁審だった。

「みんな守備に戻って戻って！まだ試合終了じゃないから！」

「…は？」

キョトンとする美徳館ナイン。

だが、セカンドの今川だけが、2塁ベース上で肩を落としてうなだれていた。

「一体どうしたんだ？」

塁審が簡潔に説明する。

「今のプレーはダブルプレーじゃない。2塁はセーフだ。私はアウトとは言っていない」

「!? エエエエ（。○。；）エエエエ!?!」

驚いたのは青春台のベンチもそうだった。

何が起きたのかわからずにザワつくスタンド。

審判団が1分程の協議の上、主審がネット裏に備え付けの球場マイクで観客に説明することになった。

「えー、今のプレーについてご説明致します」

かたずを飲んで聴き入るスタンドと両ベンチ。

「バッターの打った打球はショートゴロでした。それをセカンドに送球して、ベースカバーに入った2塁手が捕球した際、ベースを踏んでいませんでしたので、セカンドはセーフ。でもファーストはアウトです。よって、二死2，3塁から試合を続行します！」

（ノ。○。）ノオオオオオオオオオオオ

スタンドはどよめきと拍手で異様なムードになっていた。
首の皮ひとつ繋がった青春台。

一方、美徳館の内野陣はマウンドに集まってセカンドの今川をなだめる。

「気にするな今川。次のバッターを抑えれば勝ちだ」

「す：すまんみんな。俺の凡ミスだ。これで試合が決まったと思った瞬間、つい焦ってしまって…」

「いいからもう言うな！次は締まって行くぞ！」

今川の焦りも無理のないことだった。

誰しも予想しない青春台の猛反撃。長い攻撃時間。美徳館にとっては長い守備時間。

しかもエースの羽柴がノックアウトされるという大珍事。早く試合を終わらせたいたい一心が、守備のリズムを狂わせたにすぎない。

試合が再開された。バッターは1番・松平。

前打席は鋭い当たりを、それこそセカンドの今川のファインプレーに阻まれた。

——俺が最後のバッターになるわけにはいかない！リベンジしてやる！

気合充分の松平。ランナーは二人。自分のワンヒットで2点入る絶好のチャンス。

大きな深呼吸のあと、ゆっくりとバッターボックスに入る。そのとき松平はハッと気がついた。

——そうか！もし俺がここでホームランを打てば同点に追いつくんだ！よしし：

実況…ピッチャー・石山。慎重な面持ちで、打者の松平に第1球投げましたっ！

ボールはストレート。初球から打ちに出る松平。

”ブーン！”

「ストライーク！」

大きなアッパースイングの空振り。誰が見ても1発狙いだとわかるスイング。

それを見た土方監督がすかさず大声で支持を出す。

「そんな大振りはいらない。普段の自分のバッティングをしろ！」

「すみません…（^―^；）」

松平は監督の言葉に我に返る。

——俺はバカだった。気合いが入りすぎて冷静さに欠けていた。

改めて深呼吸をし直してバットを構える松平。

——ここは素直に俺らしく…

そして石山の第2球が投じられた。

大きく曲がって来る外角へのカーブ。コースはストライクゾーンだ。

脇をたたんで打ちに行く松平。

——コンパクトに打ち返せばいいんだっ！

“カキーン”

実況…三遊間ー！サード飛びつくが捕れなーい！次はショートも飛びつくー！

「抜けろー！」

思わず叫びながら走る松平。

実況…ショートも捕れない！抜けた抜けたあああっ！

「やった！！やったぜ！」

実況…レフト前ヒット！3塁ランナーホームイン！2塁ランナーはサードストップ！

まさに精神力で打った松平の一撃。

得点14ー12。わずか2点差。尚もランナー二死1，3塁。

（続く）

16話 ピンチヒッター・田安

／／／	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
美徳館	0	3	2	0	2	0	0	3	4	14
青春台	0	0	0	0	1	0	0	3	8	12

「田安、堂々と胸張って行って来い！」

「は…はいっ！」

極度の緊張の中、土方監督にハツパをかけられる田安基。
たやすはじめ

その歩く姿は、右手と右足、左手と左足が同時に出ている。

「おい田安、バットを忘れるな」

「あ…（^|~^）」

場内アナウンスが流れる。

“ 2番、近衛君に代わりまして、ピンチヒッター田安君 ”
このえ

2点差に詰め寄り、同点のランナーも出塁している大事な場面。

ここで補欠の田安を代打に使わなければならない事態が起こった。
打順が巡って来た近衛守がベンチから立ち上がれないでいたのだ。

「くっそおお…いてええ…」

激痛に顔が歪む近衛。

チームメイトが駆け寄り、近衛のユニフォームの足元をめくる。

「うわっ！なんだこの腫れは？」

「ヤベエぞ。こりゃ骨が折れてるか、ヒビが入ってるかもしれん」

その理由はまさに前打席の出来事。自打球が足に直撃したのが原因と思われる。

「ちくしょう…あのときはふくらはぎの方が痛かったのに…」
激痛と悔しさにベンチを叩く近衛。それをなだめる土方監督。

「いいんだ近衛。お前はよくやった。さっきはそんな足でランナーに出て、ホームまで返って来たじゃないか」

「ですけど…」

「お前は自分の役目を充分に果たした。係員を呼ぶからすぐに病院に行け」

「でも…」

「いいから行け！」

「すみません監督…本当にすみません」

こうして球場をあとにする近衛。担架に乗せられ球場の出口まで来ると、そこにはメグミが待っていた。

激痛をこらえながら、ひきつる笑顔でメグミを見る近衛守。

「メグにカッコ悪いとこ見せちゃってごめんな…」

すでに涙目のメグミ。

「ううん全然。守はカッコ良かったよ。あの羽柴からヒットも打った姿も、一生懸命走った姿も、どれも全てカッコ良かったよ！」

「そうか…ありがとな…」

「約束のキス、今する？」

「え？（▽、；）」

担架を抱えた係員が“ゴホン”とわざとらしい咳払いをした。

「メグ…人前だからそれはちょっと…（へ―へ；）」

「あ、そうだね（＊　　―　　＊）ゞごめん」

車に乗せられる近衛。彼が心配なメグミも一緒に付き添いたいと申し出る。

「メグはいいよ。球場に残って試合を最後まで観てくれ」

「ヤダよそんなの」

「頼むよ。そして俺に結果を教えに来てくれ」

「だからそんなのナンセンスなんだってば。ワンセグで観れるじゃん。ほら！」

メグミはケータイを取り出し、地方予選中継にチャンネルを合わせた。

「なんか俺、マヌケなこと言ったみたい…（^□^；A」

「いいからこれ観て。大事な場面だよ」

「あ、ああ…」

近衛が目にしたワンセグ画面には、バッターボックスに立つ田安の姿が映っていた。

（続く）

17話 島津の願い

「田安：気おくれするな。思いっきり行くんだ。」

ここに、自宅から野球中継を観ているひとりの少年がいた。

彼は島津光。しまずひかる青春台高校野球部のレギュラーだった男。

だが交通事故で足を複雑骨折してからは、退院後も自宅でリハビリ生活をしていた。

そんな彼に代ってレギュラーの座が舞い込んで来たのが田安ということになる。

むろん島津としては、3年生最後の年に野球ができない悔しさは感じてはいたが、田安に恨みや憎しみなど毛頭ない。

なのに田安は、島津が入院したばかりの頃、見舞いに来るなり頭を下げた。

「ごめん島津」

ベッドから上半身だけ身を起してキョトンとする島津。

「何でお前が謝るんだよ？お前は俺の事故と関係ないだろ」

「それはそうだけど：俺が島津からレギュラーを奪ってしまうことになるから…」

「おいおい。そんなこと気にしてんのか？」

「ああ：ちよつと」

島津はベッドの脇に立っていた田安の肩をポンと叩く。

「バカだな。それは見当違いさ。確かに今度の大会を棒に振る悔しさはあるけど、だからってお前が憎たらしいなんて、これっぽっちも思っていないぞ」

それでも田安は浮かない顔をしていた。

「田安。お前が気にすることじゃない。それでさえ、うちの野球は人数がギリギリなんだ。お前がレギュラーにならなきゃ誰がするん

だ？」

「：そうかもしれないけど：自分で勝ち取ったレギュラーじゃないし：単なる棚ボタに過ぎないと思うと。」

「だったらこれから猛練習すればいい。レギュラーにふさわしくなればいいんだ」

「……」

「事故ったのは俺の不注意。レギュラーになれたのはお前の運。決して無駄にするな」

「島津……」

こうした出来事があってから一月後、再び田安は島津のいる病院へやって来た。

「すまん島津……」

「なんだよ。また謝るのか？（一）；今度は何だ？」

まるで目上の人にするような深々としたお辞儀をする田安。

「実は：レギュラーを高藤に譲ったんだ」

「Σ（□）；ええっ？あいつがうちの弱小野球部に入ったのか？」

「ああ」

「でも、俺が事故る前にあいつに聞いたら、野球はもうやらないって言ってたぞ？」

「うん。最初はそう言われた。でも交渉したんだ。ずっと今までかかって」

「なんでそんなマネを……？」

「だってよ、最後の夏なんだぞ。俺たちは青春台の最後の卒業生でもあるんだ」

「そりゃわかるさ」

「だから最後に少しでも上を目指したくなっただんだ」

「上を？」

「ああ。いつものメンバーならそんなこと思わない。でも、何の奇跡か知らないけど、高藤っていうスーパースターが転校して来たん

だ」

「でもあいつ一人が野球するわけじゃないんだぞ。それにあいつはバッター。ピッチャーならまだしも」

「それもわかってる。でも少しでも上を目指すチャンスがあると思うんだ。マスコミも学校のまわりをチヨロチヨロしてるんだ」

「高藤を密着してるってことか？」

「たぶん。日の目を見ない俺たち野球部も、全国から注目されるかもしれないし」

「弱くてもか？」

「弱くてもさ。高藤を入部させればうちの野球部は注目される」

「でもそれって、かなりのプレッシャーがついて回るぞ？」

「それは覚悟の上さ。メンバーもみんな納得してる」

島津はふと首をかしげた。

「田安、お前自身は本当にそれでいいのか？補欠になるってことだぞ」

「実力から言えば当然のこと。納得してる」

「しかしなあ……」

「俺は大丈夫。俺は俺なりに自分のやれることを見つけたんだ」

「ん？なんだそりゃ？」

ちよつとだけ照れくさそうに頭をかく田安。

「カッコ良く言えば、先のりスコアラミみたいなことさ」

「ほほう……つまり偵察か？」

「うん。俺なりに相手校を視察して、データを収集しながら少しでもチームの役に立てる努力をするつもりだ」

こんな田安の謙虚な姿勢に、島津は心を打たれた。

「……お前ってやつは……ホントいい奴なんだな」

「アハハ……今頃わかった？」

「（ノ）ノコケッ！」

自宅のテレビに田安が代打で登場する姿を観ている島津。

胸には何か熱いものが込み上げてくるのを感じる。

「田安：お前ならやれる！」

つい昨日の話。田安は島津の自宅を訪ね、相手校・美徳館の極秘事項をわざわざ教えに来てくれた。

「俺、エース・羽柴の投球のクセを見つけたんだ」

突然の話に目を丸くした島津。

「もしそれが本当なら、すごい発見だけどなあ」

「でも問題は、羽柴が登板してくれるかどうかなんだ」

「ああ：そうだな。あいつは予選ではあまり投げないからな」

「うん：そこなんだよ。まさかこんなに早く当たるとは思ってたかったし」

「こればかりは、運を天に任せるしかないよな：」

こんな結論の出ない会話をしていた昨日の今日。

その運は9回裏ギリギリにやって来た。

島津は思う。これだけの猛反撃は明らかに田安の手柄。あいつの見えない超ファインプレーだと。万が一勝てたらMVPは田安しかない。

「頑張れ田安！」

だが、ピッチャーは3番手の石山。球種の判断などつかない。

この重大な局面、田安の心中やいかに：

そして彼はどんなバッティングをするのか：

(続く)

18話 執念の一打

「ストライクツー!!」

ピッチャー・石山が投げた外角いっぱいの速球に空振り。
カウント2ー2。追い込まれた田安。

『ダメだ…タイミングが合わない』

公式戦初の打席が9回裏ツーアウトでの場面。
しかし、1塁3塁のランナー二人がホームに返れば同点のケース。
緊張するなと言っても到底無理な話。
だが田安は自分を戒めた。

『結果が全てだ。補欠の初打席だから仕方ないで済む問題じゃない
!』

一度バッターボックスを外して2、3度素振りをする田安。
一体どうしたら打てるのか、短い時間の中での暗中模索…

『ここで1発打てれば逆転サヨナラだ。でも非力な俺には非現実的
すぎる…』

ここまでの4球は、ストレート2球を空振り。カーブ2球は外れ
てボール。

予想する5球目はおそらくコントロールのいいストレート。

『こうなったら俺には俺なりの一か八かの方法で…』

田安は意を決してバッターボックスに入り直した。

マウンド上のピッチャー石山がキャッチャーのサインにうなづく。

勝負の5球目…

ゆっくり足が上がり、石山の手から放たれた。紛れもなく伸びのあるストレート。

——きたっ！これだっ！

“コッーン！”

実況…プッシュバントだぁぁぁぁぁッ！

「よしっ！いけるっ！」

実況…打球はゴロでピッチャー横っ！石山がグラブを懸命に出すが追いつかなーい！

「俺に任せろっ！」

実況…セカンド今川、全速力で突っ込んで来るー！

むろん田安も1塁へ全力疾走。

これが彼の最後の打席であり、野球生活の集大成でもある。

実況…セカンド今川、素手でボールを拾ってそのまま反転してファーストへ送球ー！

バッター田安もヘッドスライディング！タイミングきわどーっ！

かたずを呑んで見守るスタンド。

テレビの前の島津。そして青春台高校の職員たち。

「セーフセーフッ！」

塁審の両手が大きく真横に広がった。

「やったああああ!!！」

土にまみれたユニフォームで、1塁ベース上から絶叫のガッツポーズをする田安。

更にどよめく歓喜のスタンド。

実況…3塁ランナーホームイン！得点14－13。なんとついに奇跡の1点差っ！

尚もランナー2死1，2塁。

しかも1塁の田安は逆転サヨナラのランナーである。

（続く）

19話 青春台高校万事休す？

／／／	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
美徳館	0	3	2	0	2	0	0	3	4	14
青春台	0	0	0	0	1	0	0	3	9	13

マウンド上に集まる美徳館学園内野陣。

1点差に詰め寄せられたまさかの展開の中、平常心を取り戻すべく、チームメイトで気を引き締め合う。

「大丈夫だ石山。お前の球がシンで捕らえられてるわけじゃない」

「そうだ。あと一人、バッターに集中すればいいんだ」

「バッターの方がプレッシャーが大きいはずだ。この3番で終わらせようぜ」

チームメイトの言葉ひとつひとつに頷く石山。

「ああ、わかった。みんなサンキュ」

こうして再びグラウンドに散った内野陣。

石山も気合いを入れ直し、ロージンバックにゆっくり手をかける。

——そうさ…こいつさえ抑えればランナーなんて関係ないんだ。

青春台の3番バッター・木戸はプレッシャーでガチガチになっていた。

気が強くてプラス思考の彼でさえ、前回スリーベースヒットを打ったにも関わらず、まるで別人。バットを握る手が震えている。

一球目。カーブに中途半端なハーフスイング。カウント1-0。完全に雰囲気吞まれている。ものすごい重圧が彼にのしかかる。

今まで経験のないプレッシャー。呼吸困難なほどの緊張。

前打席は、ダメ元で望んだ打席だから、気分的にも伸び伸び打てた。

だが今回は1点差の緊迫する場面。期待を一心に背負った重要な役割が、全て自分に課せられたのだ。

——くそお：なんとか高藤に繋げなきゃ。。

木戸の鼓動は激しさを増すばかり。頬も紅潮し、震えは足元まで達していた。

一方、青春台高校会議室——

すでに教員と一部の生徒も合わせて、30人以上がこの部屋の大画面テレビに釘付け状態になっていた。

にも関わらず、誰ひとり声もあげずにかたずを吞んで試合を見守っている。

そんな中、体育教師の小栗先生が一言呟いた。

「全てはこの木戸次第か：」

この言葉に数人がゴクツと生つばを飲んだ。

ピッチャー石山の投げる一球一球に、テレビを覗いている側も同様に力が入る。

そして木戸へ投じた四球目：

“カキーン！！”

実況…カーブを引っ張った——っ！が、3塁線切れたああー！ファールファール！

天を仰いで悔しがる木戸。

「くそっ！あれが切れなかったら…」

カウント2ー2。並行カウントだが、追い込まれたとも言える。
明らかに焦りの見えるバッターボックスの木戸。

——ちくしょう…だがこれでもうカーブは投げないはず…

バッターボックスで大きく深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる
木戸。

再びバットを構えて冷静に次の球を予想する。

——ここは大ヤマを張るしかない！

そう大胆に決意した木戸。

普通、このような場面のバッターは、どんな球にも対応できるように心構えをしなければならない。なのに木戸はそれをあえてしなかった。

その理由は、彼自身のプライドがそうさせたのかもしれない。

——決め打ちしないと、中途半端なバッティングしかできない！

まさに一か八かの大きな賭けであった。

『次は絶対にストレートだっ！』

最後の勝負に出た木戸晴信。

ピッチャーの石山がセットポジションからモーションに入った。

「さ、来いっ！」

実況…ピッチャー石山、第5球投げました！

低目にコントロールされた速球が木戸に向かって挑んでくる。

——ズバリ！ストレートだ！

木戸のバットが打ちにかかる。

——よしっ！もらった！！

そのときだった。

まさにバットがボールを捕らえようとする寸前、ストーンとバットの下を掻い潜るようにボールが落ちた。

“ブーーン！！”

実況…木戸のバットが空を切ったああー！

「しまったああ！まさかシンカーがあるとは・・・」

実況…空振り三振！試合終了！！！！

果たして、青春台の奇跡は本当にこれで潰えたのか？

（続く）

20話 運は勝機へ

「木戸、走れーっ!!」

高藤がネクストバッターボックスから大声で叫んだ。

「あっ!」

瞬間的に木戸が後ろを振り向くと、キャッチャーが慌ててマスクを外してバックネットに走りかけていた。

「急げ木戸っ! 全力で走れーっ!」

「お、おうっ!」

実況…ワイルドピッチー! キャッチャーがボールを後ろに大きくそらしていたああー!

なんと、振り逃げである。

明らかにバッターは三振しているものの、ワンバウンドした変化球をキャッチャーが捕球できずに弾いていたのだ。

ファーストへ全力疾走の木戸。ボールを追うキャッチャーの明智。

実況…キャッチャーがボールに追いついて、そのまま1塁へ送球…

「やめろ明智! もう間に合わない!」

石山が大きなジェスチャーで制止する。

万が一、キャッチャーの明智が暴投した場合、セカンドランナーが一気にホームに返って来るのを恐れたのである。

実況…投げない投げない! キャッチャー思いとどまったーっ!

ヘッドスライディングの木戸。1塁はゆうゆうセーフ。

前代未聞！試合を左右する重要な局面で、振り逃げによる出塁が成立したのである。

実況…大変なことになりました。勝負の行方がまだまだわかりません。

試合はついにクライマックスを迎えようとしていた。

得点14－13のわずか1点差。

ツアアウト満塁でバッターは願ってもない高藤雄一。

この試合最大のヤマ場と言っても過言ではない。

青春台高校は絶体絶命のピンチから一転、一打逆転サヨナラの大チャンスを迎えたのである。

スタンドは地響きのような声援と拍手が鳴りやまずにいた。

「これで間違いなく勝てる〜！ここで高藤なら勝利は100%決まりだ〜！」

喜びに沸く青春台応援団。

気合を入れて素振りを2、3度する高藤。

そのとき、ライトを守っていた羽柴が小走りで内野へ向かっているのが見えた。

高藤の顔がキュッと引き締まる。

「そうか…やはりそう来たか」

場内アナウンスが流れ、再び羽柴がマウンドへ上がるコールがなされた。

“ピッチャー・石山君に代って、羽柴君。石山君はそのままライトに入ります”

美徳館応援団の大声援が沸き起こる。

両陣営、観客も含めて熱気に包まれる球場内。

いよいよ試合は事実上の大詰め。

プロのスカウトも注目するほどの実力を持つ羽柴と高藤。
この二人が、ファイナル対決の幕を明けようとしていた。

（続く）

21話 頂上対決！羽柴 VS 高藤

マウンドに上った羽柴の投球練習が終わった。

勝利へ向けて、全てを託された美徳館の羽柴と青春台の高藤。その第1球がついに投じられようとしている。

高藤には若干の緊張はあるものの、心には余裕があった。

なぜなら、羽柴の投球グセがわかるため、球種を見破ることができからだ。

あとは打ち損じのないように心掛け、確実にミートすることだけ。左打席に入った高藤。早速セツトポジションの羽柴の口元に注目する。

『口が真一文字に締まった…ストレートだ。』

元々ストレートに強い高藤。

彼は初球から狙いに行くことを決意した。

実況…羽柴、セツトポジションから第1球…あっと！クイックで投げましたっ！

——そんな小細工、俺には通用しない！

打ちに行く高藤。球はド真ん中。まさにホームランボール！

——もらったー！！

実況…空振り——っ！高藤、スライダーにタイミングが合いません！

「なにっ？ スライダーだって？」

信じられない表情で首をかしげる高藤。

『おかしいな…』

その表情を見逃さなかったのは羽柴。

『やはりな：青春台の連中は、俺のクセを見抜いていたんだ』

石山にマウンドを譲り、ライトを守っている間、羽柴はずっと考えていた。

なぜ、青春台のバッターに打たれたのか：

なぜ、ボールを見極められたのか：

しかもまるで、最初からどんな球が来るのかわかってるような決め打ちで。

と、そこで羽柴はひらめいた。青春台は、自分の投球グセを知っている。

自分自身ではそんなことはわからないのに、相手チームは確実に知っている。

ならば一体どうしたらいいか？

羽柴の出した結論。それはクイックモーションで投げること。

自分に何らかのクセがあるとすれば、それはきつと投球モーションにある。

だからクイックにすることによって、球種が読まれることを防げると思ったのだ。

そしてまさにそれは今、高藤によって証明されたことになる。

確かに、この投げ方では、ストリートも若干スピードは落ちる。

だが、相手のウラをかくことができる最良の策だと羽柴は判断したのだ。

第2球目のクイックモーション――

高藤は再び羽柴の口元を確認する。

また真一文字…ストレートのはずだが…

“ズバン!!”

「ボール！」

内角に沈む高速スライダー。バットを振らずに見逃してカウント
1―1。

『クイックだとクセが変わってしまうのか…?』

高藤の心から余裕という文字が吹っ飛んだ。

『そんなら次は逆読みしてやる!』

そして羽柴の3球目――

口元は3球連続真一文字。

『これがスライダーってことだな!』

打ちに行く高藤。

“ズバーン!!”

「ストライクツー!!」

実況…空振りーっ! 外角いっぱいストレート! 豪打の高藤、追
い込まれました!

「ストレートだと?! そんなバカな…」

羽柴自身でさえ、いまだ気付いていない自分の投球グセ。

普段はストレートのときだけ、口元が真一文字になり、変化球は口元が緩む。

だが、クイックの場合、常に力が入るため、どんな球種にも口元が締まる。

そしてそれが功を奏し、羽柴が圧倒的に有利な立場になっていた。

体に冷たい電流が走り抜ける感覚に陥った高藤。

かつてない緊張…かつてない恐怖…

『マズイ…どうやらあいつも気付いたようだ…』

バッテリーボックスを一度外し、バットのグリップの位置を確認しながら、数秒間目を閉じて精神統一をする高藤。

——もうクセなんか当てにしない!! 読みの勝負だ!

マウンド上の羽柴も、高藤の様子を敏感に察知していた。

『これであいつも俺のクセを見ることはないだろう。次の球でラストにしてやる!』

キャッチャー・明智のサインに頷く羽柴。

『さすが明智だ。俺のウイニングショットをちゃんと知ってるぜ』
ゆっくりとしたセットポジション。

満塁のランナーなど目もくれず、バッテリー勝負に勝負に集中する羽柴。

一方、青春台ベンチも全てを高藤に託す意向だった。

土方監督は、羽柴が全くランナーを無視しているため、一か八か

のホームスチールを試みる作戦も考えたが、あまりのリスクの大きさに断念したのである。

足場を固め、ゆっくりとスタンスをとり、静かな視線を羽柴に送る高藤。

——最後は一番自信のあるボールを投げて来るはず！

マウンド上の羽柴は高藤の視線が気に入らなかった。

『ブン。冷静なフリしやがって。お前の顔を顔面蒼白にしてやるぜ！』

果たして勝負の行方は次の一球で決着するのか？

(続く)

22話 バックネット裏の少女（前編）

渾身の力を込めたボールが唸りをあげて高藤の元へ――

――ストレートに間違いない！

踏み込んで打ちに行く高藤。

“キンッ！” “ガシャーン！”

実況…バックネット裏へのファール！なんとスピード155キロ！
！！！！

「高藤め、当てやがった…」

羽柴は悔しそうな表情を隠しきれない。

高藤にしても、今のボールはかろうじて当てるのが精いっぱい。

ストレートにタイミングは合っていたが、剛速球のため、予想以上にボールが手元でホップしたのだった。

「まだあんな速い球が投げれるなんて…」

ファールチップのボールがバックネットに食い込む。その行方を何気に見た高藤。

「あっΣ（□；！！！！）」

彼の表情が突然驚きに変わった。

それは食い込んだボールではなく、その後ろに見えた人物。

「ク…クルミちゃん。」

高藤の目にしたバックネット裏には、目深に帽子をかぶり、サングラスをした少女が座っていた。

一見変装に見える姿も、高藤にはそれがクルミという少女だとすぐにわかった。

——来てくれたんだ。

高藤とこの少女との繋がり。

それはまさに、彼が今まで野球をやめていた直接の原因に関わることだった。

さかのぼ
遡ること約1年前——

当時、高2の高藤は、関東代表校として甲子園に出場。

しかもホームラン9本を含めた20打数17安打の大活躍で、チームもベスト8まで進出し、一躍脚光を浴びる選手となっていた。

チーム自体も、全国各地の強豪校から招待試合の申し込みが相次いだ。

そんな中での北海道遠征中、高藤にとって悪夢のような出来事が起きたのである。

それは試合中の彼の打席でのことだった。

高藤が思いきり引っ張った強烈な打球が、1塁側スタンドの観客席へと飛び込んだ。

有名選手を観るために、公式戦でもないのにスタンドは満員。

そのときは気にも止めずにいた高藤だったが、試合が終わった直後にベンチに届いた情報を聞いて愕然となった。

「高藤の打った打球が、中学生の女の子に直撃して病院に運ばれたらしい」

凍りつく高藤。しばらく直立不動のまま動くことができない。

取り急ぎ、少女の搬送先を確かめるとすぐに、ユニフォームのままの姿で病院へ向かった。

到着するや否や、彼の目に映った光景は、手術中のライトが点灯している状況。

母親らしき女性が泣きながら通路の長いすに座っていた。

言葉も出ない高藤。彼はただそこに立ち尽くすしかなかったのである。

術後の結果、クルミという名の少女は片目の視力を失った。

頭を撃ち抜かれたような衝撃の高藤。

翌日、病室に通されても、少女からは一言の口もきいてもらえない。

涙にくれていた表情が一目でわかる。

遠征から帰宅しても、そのことが頭から離れない。

少女の未来や人生を変えてしまった自分の罪に、毎晩悪夢にうなされるようになる。

電話すら出てくれない少女。対応はいつも母親。

だが高藤は、毎日のように電話をかけ、クルミの様子を聞きながら、何度も何度も母親に謝った。

決して許しを乞うためではない。彼女の視力が戻らない以上、自分が許されることなどあり得ないのだ。

こうしてついに高藤は、野球をやめることを決意したのである。

そうした中で月日は流れ、年も明けた。

すると、偶然にも高藤の父親の北海道転勤話が持ち上がる。

少女の住む町と、近いんだろうか？

そう真っ先に考えた高藤であった。

(続く)

23話 バックネット裏の少女（後編）

世の中には単身赴任の父親も多い。

だが、高藤雄一の父親は全くの家事オンチのため、母親と共に引っ越すことになった。

高校3年に進級する雄一は、通常なら学校の男子寮に入り、卒業まで不自由なく生活することもできる。

しかし、野球を捨てた彼の希望は、両親と共に北海道へ移住し、地元の高校に転校することだった。

その理由は明らかにひとつだけ。

まだ13歳の少女・クルミを、自分が失明させてしまった事に他ならない。

彼女の母親との電話で、クルミは今だ学校へは通学していないとのこと。

自分に何ができるかわからいけれど、ほっとくわけにはいかない。

社会的には責任を問われない高藤。

だがそれゆえに、益々自分の中で罪悪感が募っていったのも事実。彼女が笑顔を取り戻すまで、どんな形であれ、支えてあげようと決意したのである。

北海道はデカイ。

引っ越した高藤家からクルミの住む町までは汽車で2時間はかかる。

それでも高藤は週末になると汽車に乗り、少女の元へと毎週欠かさず駆け付けた。

必ず最初の一言は“ごめんね”から始まる。

が、相変わらず、クルミは口を閉ざしたまま、訪問に来る高藤を

無視し続けた。

高藤はそれほど鞭撻でもない。むしろ無口なタイプ。しゃべってくれないことには会話も進めることができない。

せっかく毎回2時間かけてクルミの家まで行っても、結局は15分ほどで退出していたのだった。

そんな時期と並行するように、高藤は田安から野球部に勧誘されることになる。

野球を捨てた高藤にとっては、当然そんな話など聞く耳も持たずに断り続けた。

だがここで簡単に引かないのが田安基^{たやすはじめ}である。

良い返事が得られないのは想定済み。要はその理由とは一体何なのかということ。

それについては何度訊ねても口が重い高藤。このままでは一向にラチがあかない。

その理由を知るべく、ついに田安は高藤の母親を訪ね、事実の全てを聞く事になる。

数日後、下校途中の高藤に田安が呼びかけた。

「高藤君、待ってくれ」

その声にうんざりして振り向く高藤。

「しつこいなお前も。俺はもう野球はしないって何度言ったら…」

「まあまあ、今日はちよっただけだからさ」

と、唐突に言葉を遮られた高藤。

「今日は君に渡したいものがあるんだ」

田安はカバンから一通の手紙を取り出し、高藤に手渡した。

「それを預かって来たんだ。今日の用はそれだけさ。確かに渡したぞ」

そう言うと、田安は足早に去って行った。

「預かった？　どういうことだ？」

手渡された手紙を確認すべく、ウラ面の名前見る高藤。
その名前を見た瞬間、彼は驚きを隠せなかった。

「——クルミちゃん!!」

（続く）

24話 運命の大飛球

高藤選手へ

突然の手紙ですみません。私、今とても反省しています。

去年、左目を失明してからというもの、全てのことに嫌気が差していました。

高藤選手が何度も病院や自宅に来てくれたのに、いつもそっけなくしたこと。

今思えば、なんて私はひどいことをしたんだろうって思います。決して高藤さんを憎んでいたわけではないのです。

・・・いえ、正直に言いますと、少しは憎んだ時期もありました。あの打球さえ飛んで来なければ、こんなことにはならなかったって。

なぜあんな打球を私に目掛けて打ったのかって。

そんな思いから、私はやり場のない気持ちを高藤選手へぶつけていました。

でもそれは間違いでした。私が球場に行かなければ良かったのです。

私は高藤選手の大ファンでした。去年の夏、甲子園での活躍をテレビで観て、とても感動したのです。

そんなスター選手が北海道に遠征に来ると聞き、私は試合を観に行かずにはいられなかったのです。

そしてその大好きな選手からあの打球を受け、失明し、私の精神はパニック状態になり、それが幾日も続きました。

あのときは思考回路がメチャクチャだったのです。どう考えたらいいか、誰が何をしゃべっているのかすら、わからなくなっていました。

それから月日が流れ、私が少し落ち着いたある日、田安さんという男の人がうちに来て、私の知らないことをいろいろ教えてくれました。

高藤選手は私のために、大好きな野球を捨てたと。

そしてこの北海道に転校してまで、私のことを気にかけてくれたこと。ずっと支えてくれようとしていること。

私はとてもショックでした。

苦しいのは私だけだと思っていた自分が恥ずかしくなりました。

高藤選手も同じ苦しみを抱いて今日まで耐えてきたんだと。

本当にごめんなさい。本当にごめんなさい。。

高藤選手は悪くありません。あれは事故です。そう、事故なんです。

クヨクヨするの、もう終わり。涙が枯れるまで泣きました。泣き疲れました。

そしてこれからの私は変わります。

世の中には盲目で頑張ってる人たちがたくさんいます。

私がこんなことでくじけてしまっただけは、その人たちに対して失礼すぎます。

私決めました。今まで登校拒否していた学校へも行ってみようと思います。

そして最後にこの手紙で1番言いたかったこと。

高藤選手に私からのお願いです。

どうか野球を続けて下さい。大好きな野球を捨てないで下さい。

高校生活最後の年と聞きました。私のためにと思うなら、今年最後の夏も打って打って、打ちまくって下さい。

今は心からそう思っています。

そして、このことを知らせて下さった田安さんにも心から感謝し

ています。

PS 約束します。いつか必ず、球場に応援に行きたいと思っています。

クルミ

今、高藤はバックネット裏に座るクルミを見て、あのときの手紙を思い出していた。

『クルミちゃん：君はすごい。とても13歳とは思えない強い精神力がある』

次第に集中力が高まってゆく高藤。

グリップの位置を確かめて、ゆっくりと構えに入る。

『クルミちゃんは約束を守った。次は俺の番だ！』

実況…ピッチャー・羽柴。次が本当のラストボールになるのか、その第6球目っ！！

クイックモーションから投げましたー！！

——絶対！に打つ！！

左打席の高藤は大きく右足を踏み込んだ。

テイクバックしたバットが渾身の力で振り下ろされる。

羽柴は瞬時に思った。

——よしっ！打ちに来たら俺の勝ちだっ！！

高藤のスイングはもう止まらない。

その時、ボールはバッターボックスの手前でストーンと沈んだ。

——勝った！

そう確信する羽柴。

「なんのっ!!！」

天才高藤、本能的か技術的か、バットの軌道を修正した。

“カッキイイイ——ン！”

実況…行ったああああ——！

なんとというバッティング！バットでボールを救ったあああ——！！！！

「よしっ！手応えあり！」

確信する高藤。

球はセンターバックスクリーンへ一直線！

青春台高校の逆転サヨナラの夢を乗せて、大飛球がグングン伸びてゆく。

（続く）

25話 激戦の結末

／／／	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
美徳館	0	3	2	0	2	0	0	3	4	14
青春台	0	0	0	0	1	0	0	3	9	13

打たれた球の行方を呆然と見送る羽柴。

——そんなバカな…

高藤の当たりにスタンドが総立ちとなる。

青春台高校の会議室で戦況を見守る職員たちや、自宅療養中の島津も全員、身を乗り出してテレビに釘付けになっていた。

予め深く守っていたセンター・長尾が更に背走する。その先はもうフェンス。

実況…飛距離は充分！センターもあきらめ……えっ？

ここで驚くべきことが起きた。

フェンスにぶつかりそうになったセンター・長尾。

彼は2メートル半の高さはあるフェンスに両手をかけ、けんすいで体を持ち上げ、足をかけてよじ登ったのだ。

だがフェンスの幅はわずか5センチほど。長くは立っていられない。しかも長尾の体は背面を向いたまま、首だけがボールの行方を追っていた。

——ダメだ。まだボールに届かない…もう考える時間はない！

瞬時に決断した長尾。雄たけびと共に体が飛ぶ。

「ぬおおおおお!!」

実況…なんと長尾!そこからジャーーンプッ!

思いきりバックハンドで腕を伸ばす長尾。

手の先はもう地上から5メートル以上の高さはある。

———頼む!グラブに入ってくれー!

執念のプレイが通じたのか、ボールがかろうじて長尾のグラブの網に引っ掛かった。

実況…危ないっ!

実況アナウンサーがそう叫ぶのは無理もなかった。

あの高さから落ちると間違いなく大ケガ。骨折しても不思議ではないからだ。

「長尾ーっ!」

彼の執念に感動して羽柴が叫ぶ。

幸か不幸か長尾は再び、幅の狭いフェンスの真上へ着地した。

だが、そこで大幅に体のバランスを崩す。

「うわあああ!!」

実況…長尾の上半体が前後に揺れているー!

この試合、まさに究極の場面が訪れた。

長尾がフェンスの外に落ちたら、青春台高校の逆転サヨナラ満塁ホームラン。

だが、グラウンド側に落ちれば美德館学園の1点差逃げ切り勝利。

どちらの結果にせよ、この試合はついに終焉を迎えるのである。

「うわあああ！！！」

——ドサッ！！

長尾の体が背中から地面に落ちた。グラウンド側である。

「やったぞ羽柴！俺達の勝ちだ！」

キャッチャー・明智がマウンドまで来て叫んだ。

「いや、まだわからない。長尾のグラブからボールがこぼれていたら……」

羽柴の言う通りである。

グラウンドにうずくまり起き上がることができない長尾。

セカンドの塁審がセンターへ急ぎ駆けつける。

もちろん、ボールがグラブにおさまっていれば美徳館の勝利。

だが、ボールがグラブからこぼれていたとしたら、すでにセカンドランナーもホームインしている青春台高校の逆転勝ちになるのだ。

審判が倒れて動かない長尾のグラブを確認する。

そして判定のとき——

「アウトオオオー！」

その瞬間、静まり返ったスタンドが一気に地響きのような大歓声に変わった。

「ゲームセットオオー！！」

主審がスタンドに負けないくらい大きな声で試合終了を宣言する。

セカンドベース手前まで走っていた高藤は呆然と立ち尽くしていた。

そしてセンター方向を見つめながらボソッと呟いた。

「…あゝあ、負けちゃった。。」

ライトとレフトに起こされ、両脇に抱えられながら整列へと向かう長尾。

その姿を見ていると、不思議と高藤の心から悔しさは生まれて来なかった。

（続く）

26話 初めての会話

惜しめないスタンドからの拍手。

10点差から1点差まで追い上げた九回裏の猛反撃も一歩及ばず、ここに青春台高校の夏が終わった。

高らかに試合終了のサイレンが鳴る。

「ごめん、みんな…」

ベンチ前に戻った高藤がナインみんなに詫びていた。

「何言ってるんだよ。お前の活躍がなけりゃ、5回でワールド負けしてたんだぞ」

木戸が笑顔で高藤の肩をポンと叩く。

「そうさ。それにこんなスリルのある試合、俺達は生れて初めて経験できたんだ」

そう言った高杉の言葉に、他のナインも相槌を打つ。

不思議なほどにみんながみんな笑顔。悔し泣きする者など一人もいなかった。

「みんなさんきゅ」

高藤は心から思った。この学校の野球部に入って本当に良かった。

転校して間違いはなかったと。

球場からの帰り道、出口付近で専用バスに乗り込もうとしている美徳館ナイン。

高藤はその中にいる羽柴の姿を見つけ、感慨深げに首を振る。

「速かったなあ、あいつの球…」

その視線に気づいたのか、羽柴が向きを変え、高藤の元へ歩いて来た。

だが、すぐそばまでというわけではなく、5、6歩歩いたところ

で立ち止まる。

「高藤君、プロの世界でまた対決しよう」

そう言うとすぐに身を反転してバスへ乗り込んだ羽柴。

彼の誘い言葉に返信できないまま、しばし立ち尽くしていた高藤。

「プロか…」

翌日、高藤は今まで一言の会話さえしてもらったことのないクルミの家を訪れた。

手紙のお礼と、自分のせいでチームが負けてしまったことへのお詫びも兼ねて。

『今日も口をきいてもらえないかもしれない…』

一抹の不安がよぎる高藤。

数分後、応接室のソファで待たされた彼の前に、ついにクルミが現れた。

意外に気の小さい一面もある高藤。クルミの顔が見れなくて、視線が下がっている。

クルミもまた照れ臭さがあるのか、高藤の正面からズレた位置に腰を下ろす。

高藤が視線を上げないまま切り出した。

「あの…前にもらった手紙…ありがとう。とても嬉しかったよ（▽、；）」

「いえそんな…：…なんか恥ずかしい（＊v・v）」

「それなのに僕はクルミちゃんに謝らなければならなくて…：…本当にごめんね」

その言葉に軽く首をかしげるクルミ。

「昨日、君は試合を見に来てくれたよね。手紙の約束をきちんと実行してくれたのに…：…それなのに僕は最後のバッターになって負けてしまった…」

「ああ…そんなこと、私に謝ることじゃないです」

「でもね…僕はクルミちゃんのおかげで野球ができるようになったんだから、あそこで打たないと意味がなかったんじゃないかって…」
「いいえ、それは全然違います」

やんわりと高藤の思いを否定するクルミ。

「私はファンの一人として、高藤選手に大好きな野球をして欲しかっただけです。いいプレイをして欲しかっただけ。勝てなかったからどうとか言う問題じゃありません」

「クルミちゃん…」

高藤は、まだ中2の女の子とは思えないような『有難い言葉』に感激した。

更に彼女は続けた。

「あの最後の打球は、美德館の守備の人が素晴らしかっただけです。完全にホームランの当たりだったですもん」

「それはそうなんだけどね（へーへー）」

「私、益々高藤選手のファンになりました。あのフォークボールを打てるなんてすごいって。これから先もずっと野球を続けて下さい」

そう言ってくれる言葉は嬉しい限りの高藤だが、心に引っ掛かる重要な事実が頭から離れないでいるのも否めない。

「クルミちゃん、僕はその…僕は君の視力を奪った人間なんだよ。こんな僕でも許してくれるのかい？」

「はい。むしろ高藤選手が野球をやめたら、余計に私も辛くて苦しくなります」

その言葉を胸に刻み込む高藤。

「…：うん。わかった。ありがとうクルミちゃん」

彼女の言うこと全てが心にじんわり染みて来る。

「どうか、今度はプロで活躍して下さい。お願いします」

帰り際、玄関まで見送ってくれたクルミと握手して、高藤は家路についた。

今まで口もきいてくれなかった少女と、初めて会話が成立した安

堵感。

そこから得た少女の思い。胸のうち。

今日は本当に来て良かったと、つくづく心から思える高藤であった。

その途中の汽車の中、彼はうっすら次の目標に思いを馳せていた。
「プロか……ようし！」

（続く）

27話 深まる引退の謎

20××年10月

引退会見を終えた高藤は、タクシーを拾って家路に向かっていった。座席の窓から外を眺めていても、目に映っているのは風景ではなく遠い過去の記憶。

そう：彼の脳裏から映し出されているのは、あの夏の日のフラッシュバック映像。

高藤が不意に笑う。

『（「」）フツッ、おかしなもんだ：引退するってときに、プロ入りを決めたときのことを思い出すなんて：』

無理もなかった。彼にとってそれは野球への未練がもたらしたものでなく、逆にケジメをつけることを意味していたからである。

高藤の引退記者会見を聞き、首を傾げる記者たちが若干数名。

ただ、その理由を本気で探ろうとしている者は誰もいなかった。一人を除いて。

その記者の名は東郷淳平。34歳。

彼は子供の頃から高藤の大ファンで、まさに憧れの存在でもあった。

それゆえ、尚更彼の引退を惜しむ気持ちが強いののは確か。

そんな東郷が高藤の会見を聞き、どこか妙で納得しかねた理由はこれ。

●代打と言えど、3割のアベレージ。体力の限界とは思えない。

●派手な引退試合はしたくないので、シーズンオフに会見を開いたこと。

●本当はひっそりやめたかったこと。

これほど日本を沸かせたスター選手がなぜこんなことを言うのだろうか？

きつと真実は別にあるに違いない！

そう睨んだ東郷は、単独で調査を開始する決意をしたのである。
ヒントは高校時代。それは高藤自身が会見で語ったこと。

今までの野球人生の中で一番印象深い試合は何かと尋ねた質問に
対する答え。

——高3の最後の夏の試合

プロ野球の公式試合を例に挙げなかったのは異例中の異例。

直感的にこれがヒントだと思った東郷。

ネット検索で知り得た事実が試合結果のみ。

美徳館学園 VS 青春台高校。

結果から観れば確かに壮絶な試合だったようだ。

14対4から、9回裏の奇跡的な猛反撃で14対13まで追い付
いている。

だがこれだけでは何もわからない。

東郷は通常の仕事をこなしながら、自分の休暇を利用して北海道
へ飛んだ。

すでに青春台高校は統合されていて、もうその名は残っていない。

その後、新たに新設校として造られた学校名は、サロマ台高校。

北海道最大であるサロマ湖の見える高台に面した高校だ。

東郷はサロマ台高校を訪ね、身分証明を提出し、青春台高校から
引き継いだ資料を見せてもらう許可を願い出た。

根気のいる作業が数時間、ついに東郷は1冊のアルバムを見つけた。

青春台高校、最後の卒業生のアルバムを。
そしてその中に若かりし日の高藤雄一を発見したのである。

東郷が真剣にアルバムを見てみると、事務長がお茶を持って現れた。

青春台高校の時代からずっと事務をしているベテラン55歳の事務長である。

「外は寒いから、これで温まりなさい」

「あ、すみません。どうぞおかまいなく…」

恐縮する東郷。

「で、どうです？探し物は見つかりましたか？」

「ええ、ありました。高藤選手の写真や、その当時の野球部の写真も載ってますね」

「おー、あったのかい。よく見つけたねえ」

「ええ、なんとか」

「本来なら、こちらがしつかり管理してなければならぬんだが、今は、サロマ台の資料を主体に整理してるから、どうしても昔の学校の物は目立たない場所に片付けられてしまうんだよ」

「いえいえ、そんなこと気にしないで下さい」

食い入るようにアルバムを見る東郷。

そんな中、彼は事務長の口から出た言葉に、驚きの新事実を知る。

「今の高校も含めて、後にも先にもウチの学校から有名人が出たのは、その年の卒業生の高藤と田安だけだったなあ」

一瞬耳を疑った東郷。

「ちょ、ちょ、ちょっと待って下さい！」

「ん？」

「田安って…誰ですか？」

今度は事務長が驚いた。

「おいおい、記者さんがそんなこと知らないのかい？その野球部のメンバー写真の中にも写ってるよ。面影は今でもあると思うが…」
目を皿のように凝らして観る東郷。すると――

「あっ！！！！」

事務長がニヤツとする。

「どうやらわかったようだね」

「え、ええ…そうか、そうだったのかあ…田安ってあの…」

東郷は気づいた。確かに面影はある。アルバムに写っている田安というこの少年。

ノンプロ（草野球）リーグで、北海道最強軍団、旭ワイン・スノーフレイクスを率い、3年連続日本一にチームを導いている名監督。

たやすはじめ
田安基、その人であった。

（続く）

28話 東郷の単独取材

田安監督と接触できたのは、東郷が北海道から帰京して10日後のこと。

旭ワイン・スノーフレークスが優勝旅行から帰国し、都内のホテルでくつろいでいるところを直撃したのだ。

普通、アポも取らずに当日取材の申し込みなど、却下されたらそれでおしまい。

東郷は考えた。引退した高藤にエールの言葉をもらいたいという名目で、取材の許可を得たのである。

「すみません。無理言って時間を作っていたきまして」
部屋に通されて、いささか恐縮していた東郷。

テーブルを挟んで相対する田安。ついに単独取材が実現した。

「しかし驚いたなあ。私と高藤の繋がりを知ってる者がいたとはね」
ペットボトルのミネラルウォーターを片手に田安が言う。

「あ、君も飲む？水しかないけど」

「いえ、おかまいなく」

「あそう」

田安はそう言うと共に水を一気に飲みした。

「で、何でわかったんだい？私と高藤の関係を」

「はい。ちょうど取材中に青春台高校の昔のアルバムを見つけたものですから」

「ふう〜ん。そこまで調べて何か意味はあるのかい？」

「ええ、実はですね…」

東郷は本題を切り出した。

「僕は知りたいんです。高藤選手が引退する本当の理由を」
「!!!!」

ゆとりの表情だった田安の顔が一変する。

「君は…えと、名前なんてったっけ？」

「東郷です」

「東郷君、今日は高藤にエールを贈る言葉を取材に来たんじゃなかったのかい？」

東郷は再び恐縮しながら謝罪した。

「すみません。ああでも言わないと、取材させてもらえないと思ったものですから」

「困った人だな君は。あいつの引退理由は会見で言った通りだと思うが？」

東郷は、ここでゆっくり間を置き、一度目線を落としてから再び顔を上げ、田安の目を見ながらしっかりと口調で話し出した。

「いいえ。僕にはそう思えません。高藤選手は代打でもまだ3割を打つ選手でした。とても体力の限界が理由とは考えられません」

「ではこう考えたらどうだろう？野球選手にケガはつきものだ。人に言えないケガをずっと今まで我慢してプレイしてたかもしれないじゃないか」

「なぜ人に言えないんです？」

「そりゃ君、プロは厳しい世界だ。ケガで戦列を離れたら、すぐに取って代わられる」

「じゃあ高藤選手はどこか致命的な大ケガか病気でもしているの？」

「私も彼にしばらく会ってないから詳しいことはわからんがね」

「そうですね…じゃあ僕の方が詳しいですね」

そう聞いて驚く田安。

「どういうことだ？」

東郷は手帳を取り出し、自分の書いたメモを眺めた。

「えとですね…ある筋から高藤選手の健康診断と、定期的にされている人間ドックの結果を入手したんですよ」

「そんなバカな！医者には患者の守秘義務がある。そんなプライベートなデータを記者に教えるはずはない」

「いや実はですね。僕、高藤選手のいた球団関係者とちょっと横の

繋がりがありませんね」

「ん？それがこれとどう関係があるんだ？」

「あの球団に所属する選手はですね、定期健診の結果を全て報告する義務があるんですよ。これでわかりましたか？」

すぐにピンと来た田安。

「あー、なるほど。そういうことか：さすが記者さんだね」

「まあそういうことです。で、その結果ですが、高藤選手は健康そのもの。感染症やその他の病気にも一切かかってません」

数秒の間の後、田安が言う。

「そうか：まあ、健康ならそれでいいことじゃないか」

「ええ、だから田安監督に聞きに来たんです。彼の引退の本当の理由を」

「残念ながら知らないな」

即答した田安の顔はどこか浮かない。東郷はその表情を見て確信した。

——よしっ、ここで切り札だ！

「監督にお尋ねします。高校時代、あなたは転校生だった高藤選手を熱心に野球部に勧誘したそうですね」

田安がさっきよりも更に驚きの表情に変わる。

「どうしてそれを…」

「サロマ台高校の事務長から聞きました。彼は青春台高校が統合される前から働いていた人です」

「……」

「事務長は、あの壮絶な夏の試合を会議室のテレビで観ていたそうです」

「壮絶な試合…」

「ええ。美徳館学園戦です。監督の最後の夏になった試合です」

「ああ、あの試合は忘れもしないよ。私達の思い出の宝だからな」

「はい。でも本題はその試合と違います。なぜ高藤選手は、あなたが勧誘しないと野球部に入らなかったのか？それよりもなぜ転校したのかです」

「それは親御さんの転勤のせいだよ」

「でもですね、高藤選手のいた関東義塾学園は、当時甲子園に出て旋風を起こしたんですよ。それに寮も完備されていて、親御さんから離れても十分に暮らせます」

「…だからどうだと言うんだ？人にはいろいろ事情というものがあるもんだ」

「それはわかってます。僕も面白半分取材して来たわけじゃありません。では僕が調べた最後の事実をここに…」

そう言うと、東郷はカバンから新聞記事のコピーを取り出した。

「これは僕がこの10日の間に調べたものです」

彼はテーブルの上にそれを広げた。怪訝そうに覗き込む田安。

「こ…これはっ!!」

(続く)

29話 何かある！

田安監督の反応の大きさに、正直東郷も驚いた。

小さな数行の記事。見逃してしまってもおかしくないような記事。

●北・北海道スポーツ新聞より抜粋

“この日の招待試合で、5回表、高藤選手の打ったファールボールがスタンドで観戦中の少女に当たり、救急車で運ばれた。命に別状はない模様”

ただし、今回の引退とは何の関係もない過去の出来事。結びつける根拠も全くない。

ただ、当時の高藤選手が一時期、野球から遠ざかっていた理由と関係してはいないのか、それが聞きたくて田安監督にこの記事を見せたまでの事。

「君は過去を探って何を書こうとしてるんだ？」

と、逆質問される東郷。明らかに機嫌が急に悪くなった田安。

「すみません。本題とはズレてしまったかもしれませんが、一つ一つ過去から調べることで、わかって来ることがあるんじゃないかと思ひまして：」

「そんな過去の出来事をほじくり出して、何の得があるんだ？」

「別に得はないですけど：」

田安は少し声を荒げる口調になった。

「人には誰でも触れられたくない部分ってのがあるもんだ。君だつてあるだろう？」

根が真面目な田安は感情が顔に現れやすい。隠し事が下手なタイプと言える。

さりげなく東郷の質問を交わすことができず、逆に何か裏事情が

あることを東郷に悟られてしまう。

「そりゃまあそうですね……ってことはやっぱり何か知ってらっしゃるんですね？」

一瞬、言葉に詰まる田安。

「わかってどうなるものでもない事は、わからない方がいい場合もある」

と、苦し紛れに出た言葉。

「それは高藤選手にとって、何か不名誉なことだからでしょうか？」
矢継ぎ早に出た東郷の問いに、田安がいきなりテーブルを“バンッ！”と叩いた。

「君たちはすぐ何でもそういう見方をするから、何もしゃべる気はしないんだ！もう帰ってくれないか」

しかし東郷は、田安の荒声にたじろぎもせず、凜とした態度で対応する。

「僕の伺い方が気に障ったのなら申し訳ありません。でもこれだけはわかって欲しいのです。僕は単なる興味本意で調べているのではありません」

「興味じゃなかったら何だと言うんだ？」

東郷は田安の目を見てきっぱりと言った。

「僕は子供の頃からずっと高藤選手の大ファンだからです。憧れの選手です。今でも」

「むう……」

「監督わかりますか？自分の大好きな選手が突然引退を発表したショックを」

「……」

「僕はですね、高藤選手はまだまだ野球ができると思ってたんですよ。いや、もっとやって欲しかったんです」

「それは私だって同じ気持ちだ」

「でも監督はその理由を知っているから納得できました。そうじゃありませんか？」

「それは…」

「でも僕は何ひとつ知らないんです。納得できないんです。高藤選手がそう決断したからには、よほどの理由があるのでしょうか。それは尊重するつもりです。ただ一ファンとして、納得する理由が知りたいだけなんです」

数分間、沈黙が続いた。

やがて感情の落ち着いた田安が口を開く。

「君の言い分はよくわかった。私はこれからうちの選手たちとディナーの予定だから、もうそろそろ行かなくてはならないんだ」

「わかりました。どうも突然お邪魔して申し訳ありませんでした。良ければまた後日、僕の名刺に書いてある連絡先に電話下さればすぐに伺います」

「うむ…」

こうしてこの日の単独取材はこれで終わった。

次の日、また次の日も田安監督からの連絡は来なかった。

更にその後1週間が経過し、時間の都合のついた東郷が、再び田安にアポイントメントをとろうとしていたとき、彼のケータイに着信があった。

「スノーフレークスの田安だ」

「ど、どうも、ご無沙汰してます」

「簡単に用件を言う。11月10日午後2時、旭ワイン球場に来なさい」

「えっ？球場ですか？北海道の？」

「極秘事項だ。マスコミ関係者は君にしか言ってない」

「はあ…でも一体何が…？」

「来たらわかる。来なきゃわからん。それでは」

用件を言い終えた田安は唐突に電話を切った。

しばし啞然とする東郷。だが行動する意思は固まった。

「来週か…よし行こう。また北海道へ」

（続く）

30話 イキな演出

20××年11月10日

北海道の気温はすでにもう氷点下。

積雪はまだそれほどでもないが、防寒せずには外出もできない時期。

そんな中、旭ワインドーム球場では熱いセレモニーが行われていた。しかも極秘で。

この球場はドームのため、空調設備も万端。温度も一定が保たれているので、一步中に入るとまるで別世界。

草野球球団がプロ並みのホーム球場を持つことは異例。市のバックアップもあって成り立っている球場でもある。

当初は“旭市民球場”と仮名が決められていたが、市の特産物を全国にアピールする方向で話が進み、現在の名称になっている。

高藤雄一は、感動と込み上げる思いでいっぱいだった。

田安の粋な計らいで、非公式に行われている高藤の引退試合。

すでにプロを引退している高藤は、本日一日限定で、旭ワイン・スノーフレークスに入団し、ユニフォームに袖を通していたのだ。

しかも対戦相手は、羽柴監督率いる奄美コバルトオーシャンズ。あまみ

田安の呼びかけに一つ返事で対戦を快諾した羽柴。

彼は紛れもなく、高藤の高校時代からのライバルであった人物。

今から26年前、青春台高校と美徳館学園で、地区予選ながら球史に残る激戦があった。その試合を制したときのエースが羽柴監督である。

彼はその年、北・北海道代表校として甲子園に出場し、見事全国

制覇を成し遂げた。

高校卒業後は、ドラフト1位指名でプロ入りし、同じくプロ入りの高藤と何度となく死闘を繰り広げている。

だが彼はプロ生活11年目に、致命的となる利き腕の肘の故障が悪化し、引退を余儀なくされたのである。

そして今は、社会人野球の監督として奄美コバルトオーシャンズに招かれ、チームの指揮をとっている。

今日の高藤のための引退試合も、すでに9回裏。4―3で奄美が1点リード。

旭ワインの攻撃もすでに二死ランナーなし。

だが、あと一人塁に出れば、4番の高藤まで打順がまわる状況。

ここで羽柴監督はマウンドのピッチャーに3番敬遠のサインを送った。

キャッチャーが立ち上がってミットを構えるのを見てピンと来た高藤は、相手ベンチの羽柴に一礼した。

「ありがとう。。本当にありがとう」

羽柴監督の思いやりに胸がジーンとなる高藤。

そんな時、後ろからポンと彼の肩を叩く田安監督。

「高藤。泣くのはまだ早いぞ。最後の打席、思いきり打ってから泣け」

「あ、ああ…（。！A）ホロリ」

まさに最大の見せ場になる場面がこの引退試合に訪れた。

1点差の二死1塁で4番の高藤。ホームランで逆転サヨナラになる。

最後の最後にこんな状況になるのも、高藤の強運なのかもしれない。

奄美ベンチの羽柴監督はここで動いた。ピッチャーの交代である。

「藤吉郎、行け！」
とうきちろう

「はいっ！」

監督に言われて駆け足でマウンドに行く若者がひとり。

何を隠そう、この若者は羽柴藤吉郎。監督の実の息子なのである。

羽柴監督はベンチ前で腕組みをしながら心で呟いていた。

『高藤、敬遠は特別サービスだ。だが勝負は手加減しないぞ。真剣勝負だ！お前だってそれを望んでいるはず』

マウンドに上がった藤吉郎が投球練習を始めた。

“バシーン！！”

“ビシッ！！”

“ズバーン！！”

剛速球がうなりをあげる。啞然とする高藤。

「こいつはすごいや…しかも球が重そうだ」

まだ19歳の羽柴藤吉郎。これほどの実力の若者がなぜプロ入りしていないのか？

その理由として、彼は野球経験がほとんどない。

なぜなら彼は、中学、高校時代と陸上で砲丸投げをしていたからである。

ドラフト候補にもならないのは当然の話。

こうして羽柴監督は、自分の息子を我がチームへ入れ、プロ入りへの養成も兼ねようとしていたのである。

砲丸投げで培ったパワーが、そのまま野球のボールに乗り移ったかのような、球質の重い剛速球がミットの快音を叩きだす。

——どうだ高藤。俺の息子の球が打てるか？

世代を超えて、羽柴対高藤の一騎打ちが行われようとしていた。
(続く)

31話 ラスト勝負

羽田発千歳行きの飛行機がエンジントラブルのため、1便出遅れた東郷。

彼が旭ワイン球場に辿り着いた時には、試合はすでに9回裏を迎えていた。

詳しい事情のわからない東郷ではあったが、おおよその予感はしていた。

そう、球場に呼ばれるということは、おそらく田安監督は高藤の引退試合を企画しているのではないかと。

そしてそれは見事に的中した。

だが、さすがに高藤が、旭ワインのユニフォームでバッターボックスに立っている予想外の姿を見たときは正直驚いた。

しかも対戦相手が奄美で、しかも監督が元プロ野球選手で一世を風靡した羽柴だということに気づくと、その驚きも倍増。

「すごい！こいつはまさにプレミアな試合だ！ちくしょう、最初から観たかった…」

自分の頭をコツンと叩いて悔やむ東郷であった。

田安監督は、高藤がバッターボックスに立つ直前にアドバイスをしていた。

「羽柴の息子はまだ変化球は未熟だ。ストレートに的を絞っていいだろう」

そう耳打ちされた高藤。

「それにしても速いな」

「ああ、しかも重い。じっくり様子を見て行ったらいい」
フフッと高藤が笑う。

「ん？どうした？」

「ああすまんすまん。お前がじっくりなんて言うもんだからさ」
不思議に首をかしげる田安。

「それがおかしいのか？」

「だって俺はもう引退してるしな。せっかくお前に用意してもらった舞台を楽しみたいんだ。神経とがらせるのはもういい」

「でも打ちたいだろ？」

「そりゃ打ちたいよ。だから何も考えずに初球から行く」

「様子も見ないでか？」

「お前が教えてくれたじゃないか。ストレートだって。俺もそう思うんだ。自信のある球を1番最初に投げるのが当然だ」

今度は田安がフフッと笑う。

「高藤らしいな。よし、じゃあ俺もベンチから初球に注目してる。思いきり最後のバッティングして来い」

「おう、さんきゅ」

高藤の表情はリラックスそのもの。むしろ笑顔。とてもこれから9回裏ツーアウトで打席に立つバッターとは思えないほどだ。

そして彼は真正正銘、最後のバッターボックスに入り、静かにバットを構えた。

「プレイ！」

主審の声がかかり、ピッチャーの羽柴藤吉郎がセットに入る。

それをジッと見つめる高藤。さすがに打つ直前になると表情が引き締まる。

ピッチャーの足が上がって投球が始まった。グリーンと後ろに引かれた腕。

そこから渾身の力を込めたボールが放たれようとしていた。

「うおおおおお！」

19歳とはとても思えぬ気迫の雄たけびの羽柴藤吉郎。

しなる腕。体全身のバネで振り下ろされたボールは、明らかに羽柴の全体重が押し掛かった重いボールになって高藤に迫る。

——よしっ！この1球で決める！

右足を踏み込んだ高藤。バットがしなるように振り下ろされる。球は150キロ超。

——カッツツ……キイイイイン！！！！

手首が押し戻されるような物凄い振動。だが高藤も渾身の力で弾き返した。

ボールはセンターバックスクリーンへ一直線に伸びて行く。

と、その瞬間、高藤の脳裏にあの日の9回ウラが蘇り、この場面の映像と重なった。

（続く）

32話 ひっそりと華々しく

「やった！逆転ツーランだ！」

旭ワインの選手たちがベントから身を乗り出して打球の行方を追う。

あらかじめ深い守備位置のセンターも、更にバックしてフェンスに背中がついた。

「入るぞ入るぞ！」

こういったナインの声をよそに、高藤自身は結果を悟っていた。

——いやダメだ…届かない

真上を見上げたセンターが、一度しゃがんでから反動をつけ、思い切りジャンプして手を伸ばした。

——パシッ！

タイミングビンゴのジャンピングキャッチ。

ボールはしっかりそのグラブの中に収まった。

「あゝあ…高藤さん惜しい！」

ベンチから身を乗り出していたナインが口ぐちに言う。

もう一歩伸びが足りないセンターフライ。

こうして高藤の野球生活はここに幕を閉じたのである。

ベンチまで小走りに戻って来る高藤の表情には一片の曇もない。むしろほころんだ口元からは笑顔がこぼれ、白い歯が見えている。ナインに拍手で迎えられると、照れ笑いしながら頭をかいた。

「いやー、噂通り重い球だったなあ。まだ手がしびれてるよ」
手首をブラブラさせて言う高藤。

そんな彼に肩をポンと叩いてフォローする田安監督。
「あの球をあそこまで持って行くのはお前だけさ。引退するには惜しいくらいだ」

その言葉を受けて高藤がフツと笑う。

「いや、違うな。もう限界さ。5年前の俺だったらスタンドまで届いてる」

「それにしても…」

「もう潮どきなんだよ田安。俺がここで打ったら引退撤回しなきゃなんないじゃんか」

「アハハ、そりやそうだな。じゃそうするか？」

「よせよ。そりや冗談だ。いいんだよもう。気遣いサンキュ。どれ、向こうのチームにも挨拶してこよう」

再び小走りでマウンド方向へ行く高藤。

コバルトオーシャンズのナインもマウンド中央に集まり拍手で彼を迎える。

その中には高校時代からのライバルでもあった羽柴監督が、花束を持って出迎えていた。

「お疲れさん。すまん。打ちとらせてもらって」

「いや、最後にいい真剣勝負をさせてもらったよ。ありがとう」

次にスノーフレイクスベンチも動いた。

「さあ、お前たちもマウンドに行つて、高藤を胴上げして来い！」

「は、はいっ！」

一斉にマウンドへ走るナイン。腕組みしながらそれを見ている田安監督。

その背後から、ゾロゾロと彼の見慣れた顔の面々が現れた。

「田安、俺達もマウンドに行つていいだろ？」

そこには彼をはじめ、言わずと知れた青春台高校野球部OBの面々がズラリと揃っていたのである。

「おう、岩倉！弁当屋の方は大丈夫だったのか？」

「アハハ。何言ってるんだよ。もう俺は管理職だぞ。毎日チェーン店まわりのチェックさ。時間は自由だ」

「へえ、偉くなったなあ」

そこに割って入ったのが木戸。

「偉くなったのは田安の方じゃないか。あの時の補欠が今はノンプロ界の3年連続優勝監督なんだからな」

「まあまあ、こんなところで褒め合っても仕方ない。今日の主役は高藤だからな」

「ああ、そうだそうだ。じゃ行ってくる」

高藤が胴上げで宙を舞っているさ中、一人一人花束を持った同級生たちが思い思いにマウンドに向かった。

松平、近衛、木戸、大久保、高杉、一橋、岩倉、小松、そして島津まで。

「監督は行かないんですか？」

と、次に背後から田安に声をかけたのは記者の東郷だった。

「おう、君か。もう来ないのかと思ったぞ」

「すいません。飛行機のトラブルでちよつと遅れまして…」

「そうだったのか。君こそあの高藤の胴上げ写真を撮らなくていいのか？」

「僕はカメラマンじゃないので…それよりお話を聞きたいと思いまして」

「バカだな。写真があればスクープ記事になったのに」

東郷は不思議に思った。

「でも監督。今日の試合はマスコミに知られたくないから、極秘で決めたことじゃなかったんですか？」

「まあそうだ」

「なのに監督は僕を招待してくれました。これを記事にしても構わないんですか？」

田安は東郷の肩をポンと叩き、にこやかな笑顔で言った。

「君は子供の頃から高藤のファンだって言っただじやないか」

「え、ええ：言いましたけど。」

「高藤のファンは彼を裏切らないと信じてるからだ」

東郷は、この言葉の裏には必ず何かが隠されていると確信した。

「監督。僕にとってはわからないことづくめなので教えてもらえませんか？」

「あまりしゃべりすぎると高藤に怒られるからな」

「まあそう言わずに――」
あの人たちは高校時代の野球部員のようですね？」

「ああそうだ。俺が招待して、この試合も最初から内野席で観ていたんだ」

「そうだったんですか……でもそれだけでは僕にはまだわかりません」

「ん？何がだ？」

「監督は僕に言われました。ここに来ればわかると。でもさっぱり……」

そのとき、ベンチ横から田安に呼びかける声がした。

「監督、こちらにお連れしました」

「おお、そうか。じゃあそのままグラウンドへご案内してあげなさい。ゆっくりとな」

「はい」

益々わけのわからない表情になる東郷。

彼が入口方向に目をやると、そこから腕を引かれて入って来たのは、一人の細身な女性だった。

やや、たどたどしい歩き方ではあるが、歩く方向は一点を見据え

ている。

不意にこちらに振り向き、彼女が一礼した。

でもそれは東郷にではなく、となりにいる田安への挨拶だった。

そして彼女は花束を抱えながら、一步一步スタツプらしい男に誘導されながらマウンドへ向かったのである。

「監督、あの人はどうやら目が不自由のようですね？」

「ん？ うん……まあ元々あの人は弱視だったみたいなんだが、ある事故で片目を失ってね。もう片方の目もここ最近、状態が悪いようなんだ」

「…それはお気の毒で。。でもあの人は一体誰……（。〇。；）ハッ！ も、もしか？」

マウンド上では胴上げの終わった高藤が、青春台高校OBから花束を受け取り、意気揚揚とベンチに戻ろうとしていた。

が、その先にいる女性を見るとすぐに足が止まって驚きの表情に変わった。

それを見ていた東郷が田安に小声で問いかける。

「監督、彼女はひょっとして高藤選手が高校時代に起こした…その…」

「あの人は高藤の奥さんだよ」

「えっ…？」

高藤の驚きの表情は一瞬だけで、すぐに笑顔に変わった。

「クルミ…来てくれたんだ。」

同じ笑顔で花束を渡すクルミ。

「バカね。こんな大事なことを黙ってるなんて」

「……うん。。ごめん。。ごめんな」

（続く）

33話 愛するがゆえ

極秘で行われた高藤の非公開引退セレモニーが終了した。

グラウンドから去りゆく高藤夫妻の後姿を黙って見ているしかなかった東郷。

正直、この絶好の場面にインタビューにも行けない記者など失格である。

だがそれは、東郷にはどうしてもできないことだった。

高藤は妻のクルミの肩にそっと腕をまわし、目の悪い彼女を誘導し、支えながらゆっくりとゲートに向かって歩いている。

「クルミ、足元気を付けて。ここから段差がある。ほら、ゆっくりでいいから。」

それはとても優しくて丁寧な声。妻への愛情がひしひしと伝わってくる声だった。

東郷の子供の頃からの憧れでもある、この高藤雄一。

そんな彼と奥さんの中に割ってインタビューなど、できるはずもなかったのである。

——10分後、球場内の監督控え室にて

自分のイスに座っている田安は、立ったままの東郷を前に苦笑していた。

「せっかく呼んでやったのに君は何もできなかったんだなあ」

「…はい。。情けない話です…」

「まあいい。これで君が本当に高藤のファンだったのがわかった気もするしな」

「…それは絶対に本当です。ウソ偽りはありません」

「で、君はこれからどうするつもりだ？」

東郷は迷った。これ以上、高藤を追いかけるのは心苦しい。ここはやはり：

「監督、お願いしますよ。あなたは全てわかってらっしゃるんでしょう？　どうか僕に教えて下さいよ。高藤選手引退の本当のわけを」

田安がひとつ咳払いをしたあと、軽いため息をつく。

「ん、全てなんて知らないさ。あの夫婦にしかわからないこともあるし：」

「このままじゃ僕、東京に帰れませんよ：」

「まあ待て。何も教えないわけじゃない。私が君をわざわざ呼んだんだからな」

「ええ、そうです。監督は僕に“来ればわかる”とおっしゃった。でも僕にはまだ、わかりかけた段階にすぎません」

田安は数秒間、ジッと東郷の真剣な眼差しを見てとり、彼が事実を面白おかしく書きたてるような人物ではないと確信した。

「さっき君が言いかけたこと：あれは君の思った通りだよ」

「えっ？」

「高校時代に高藤が打ったファウルボールが、観客席の少女を直撃する事件があったことは君も調べがついてるんだろう」

「ええ、まあ：」

「その時の少女がクルミさん：今は高藤の奥さんでもある」

「や：やはり。」

「片目を失った彼女は、もう片方の弱視の目までも今や光を失おうとしている。高藤はこれから引退後の一生を、彼女のサポートに全力を尽くすと心に誓ったんだよ」

「……そうだったんですか。」

「うむ。プロ野球選手は遠征が多い。家を留守にすることも少なくない。だがクルミさんを一人にするわけにもいかない。大まかに言えばそんなところだ」

「じゃあ実際はやはり体力の限界ではなかったんですね？」

ほんの少しの間があったが、田安はすぐに返答した。

「いや：限界を感じていたのは確かだ。奴が俺にそう言ってたよ。さっきの打球がホームランにならなかったのもそう。あいつは自分をわかってる。引き際もちゃんと心得てる男なのさ」

東郷はいまいち高藤引退の理由に納得がいかなかった。

例え野球人としてのピークは過ぎているとはいえ、代打でこれほどの成績と、チャンスに強いのは今シーズンも変わりなかったからだ。

「監督、お言葉ですけど、高藤選手はまだ3年はできると思います。監督はそうは思わないんですか？」

田安は腕組みをして椅子の背にもたれながら苦笑する。

「ハハ：君にだから言うが、実は私も君と全く同じことを考えていて、高藤と話し合ったことがあるんだ」

「そ：それで？」

東郷は身を乗り出して聴き耳を立てる。

「奥さんの面倒は身内の誰かに任せたらどうかとね」

「そうですよ。僕もそう思います。それに奥さん自身だって、自分の体のために亭主が引退するなんて、逆に責任を感じて苦しんでしまうのではないでしょうか？」

「そうなんだよ。まさにその通りのことが起きたんだ。自分さえいなければ高藤は野球ができるってね。奥さんは離婚するとまで言いだしたのさ」

東郷は愕然とした。この引退の裏側には、高藤選手にしても奥さんにしても、田安監督にしても、それぞれの並々ならぬ心の葛藤があったに違いない。

「監督：それなのになぜ高藤選手は引退を決意したんでしょうか？奥さんがどう思ってたことくらい、わかるはずじゃ：」

「わかってるさ。当然わかってる。その上で奴が決めた結論なんだよ」

わずかに首をかしげる東郷。

「僕には…よくわかりません。監督はわかりますか？」

田安は腕組みしたまま、笑みをこぼした。今度は苦笑ではない。
「それはな、高藤はクルミさんを心から愛しているからだよ。愛するがゆえだ」

「はぁ……？」

（続く）

34話 引退の裏事情

「君にわかるかな？高藤は奥さんを愛してるからこそ、引退を決意したんだよ。クルミさんの面倒を見るのは自分しかいないってね。他の誰にも彼女の世話はさせたくないかったのさ」

「うーん…」

田安の言っていることはわかるが、今一つ腑に落ちない東郷。

「すみません。確かにそう聞くと、夫婦の愛情の深さは感じますけど…」

「けど何だね？」

「あの…こんなこと僕が言うのも無礼で申し訳ないんですが、高藤選手は自分の償いのために奥さんと結婚したんじゃないかと…」

それを聞いた田安の眼光が鋭くなった。

「なるほど。君はそう思ったのか。責任感の強い高藤がクルミさんの片目を失明させた罪の償いのために、仕方なく結婚したと？」

「いや…そんな仕方なくっていうんじゃないかと…その…愛情よりもそっちの意識が高かったのかなあって…」

「ほお…」

田安を怒らせてしまったかもしれないと、焦り始める東郷。

「す、すみません。僕の勝手な推測で好き勝手なことを言ってしまった…。失礼の談、どうかお許し下さい」

東郷は直立の態勢から、何度も田安に頭を下げた。

「いや、いいんだ。そう思うのも当然だ。それは高藤も予想済みだったんだ」

「えっ？」

「高藤の引退の真相が知れたらマスコミ関係者も含めて、世間は皆そう思うだろう。もし仮にそうならどうなると思う？」

「どうなるって…その…きっと高藤選手にはまだ余力が残ってるんだらうと…ああ！」

「わかったようだね？クルミさんは益々自分を責めるようになる。自分が高藤と結婚しなければ、彼は野球をもっと続けていたのよね」

「え、ええ。確かに…」

「高藤は断じてそれを嫌った。だから彼はシーズンが終わってから、静かに引退したのさ。派手な引退セレモニーをするとマスコミに注目される。奥さんのこともバレル」

「はい…」

「最初は美談として語られるかもしれない。だが世間の目も厳しい。逆に奥さんがやり玉に挙げられる可能性が高い」

「そんなことは…」

「いや、ある！君がさっき言ったように、高藤があと3年はプレイできると思ってるファンにしてみれば、奥さんの一件を良く思わない人間も必ず出てくる。人間は十人十色なんだよ東郷くん」

「はあ…」

「高藤はクルミさんを追い詰めたくなかった。ほんの少しも傷つけたくなかった。彼女をとにかく守りたかったんだ」

言葉の出ない東郷。だがそれは単に呆然としていたわけではなく、田安の話に自分の間違った解釈を恥じ、申し訳ない気持ちでいっぱいになっていたのだ。

「監督…本当にすみませんでした。僕、なんてことを…」

田安の目からはすでに鋭さは消えていた。そして優しい口調で東郷に語りかける。

「いいんだもう。記者であり、高藤ファンの君にさえわかってもらえたらそれで…それに何より、私も君と同じことを思ったことがあってね。奴に問いただしたことがあるんだ」

「ええっ？それはいつですか？」

「あいつが私に彼女と結婚するって報告に来たときさ。彼女に責任を持って報いる事はいい。でも、それと愛情をこっちゃんにしてないか？ってね」

「…そ、それで？」

「（「！」）フッフ…あいつはきっぱりこう言ったよ」

真剣な眼差しで田安の言葉に耳を傾けている東郷であった。

——旭市ロイヤルプリンスホテルの一室にて

田安が極秘で企画してくれた引退セレモニーを終え、ホテルに着いた高藤夫妻。

部屋はすでに田安の計らいでツインルームを予約されていた。ゆっくりとした時間の中で夫婦水入らずのディナーを済ませ、この日の夜もすでに11時半。高藤雄一と妻・クルミはすでにベッドの中。

静かな寝息のクルミの横顔をそっと見ていると、なぜだか自然に思い出されて来たのが、彼女との結婚を決意した日のこと。

そう、それがまさにプロポーズをした日……

彼の思いは今から19年前にさかのぼって行く。。。

（続く）

35話 あの日のプロポーズ

とある料亭の個室にて。

和食の好きなクルミのために選んだ落ち着いた店。テーブルに向き合っている二人。

「あの…ごめんなさい。とっても嬉しいんですけど、お断りします」
申し訳なさそうな、それでいてきっぱりと返事をしたクルミ。

「（□；）えっ!？」

予想はしてなくもなかったが、さすがに一つ返事で却下されると心にズキンと響く。

ここに高藤のプロポーズはあえなく撃沈した。高藤24歳。クルミ20歳の秋。

この年、高藤はプロ入り6年目で初のホームラン王に輝き、チームも優勝した。

クルミも成人に達し、彼自身も名誉なタイトルを獲った。プロポーズをするには絶好のタイミングのはずだった。

「他に好きな人でもいるの？」

黙って『はい、そうですか』とも言えない高藤。やはり理由は聞きたい。

「いえ：そんな人はいません」

「僕が君のタイプの男じゃないってことかな？」

「いいえ。そんなじゃないです」

「遠距離であまりデートできなかったから？僕は遠征も多いし…」

確かにプロ野球の世界に入ると、1年を通して家にいる時間は少ない。

高藤は高校を卒業後、18歳でプロ入りしてからもクルミとの縁

は続いていた。

初月給のときにはネックスやカバンを。初ホームランを打ったときにはそのバットにサインをしてプレゼント。

また、クルミの家族を球場の特等席に招待したりと様々な方法で尽くしていた。

ただ、ひとつ難点なのが、高藤はクルミとともにデートをしたことがなかった。

マスコミに追いまわされるのを嫌う彼は、容易にクルミを誘うことはそれほどできなかったのである。

「ううん。それも違う。雄一さんには感謝してる。何から何まで親切で優しくて…」

「…でも僕が嫌い？」

「嫌いなんかじゃないです…」

腑に落ちない高藤。

「じゃあなんで…？」

ややうつむき加減のクルミ。だが意を決したのか、顔を上げ、高藤に目を合わせる。

「雄一さんは私の目を失明させた罪悪感からそう言っているじゃないかって思えて…」

「えっ？」

それはまさにクルミが長年ずっと思っていたことだった。

「雄一さんはもう充分私に尽くしてくれました。不慮の事故の責任感から今日まで私に充分償ってくれました。もう…もう私は大丈夫です…」

その目にはすでに涙がじわじわとにじんで来ていた。

「私はまだ20歳。未熟で何もできない私にプロ野球選手の奥さんなんて勤まると思えないし、雄一さんの重荷になるだけです。迷惑しかかけられない…」

ひとしずくこぼれた涙にハンカチを差し出す高藤。だがそれを遮

るクルミ。

「大丈夫です。持ってます」

かつて高藤に買ってもらったカバンからハンカチを取り出して涙をぬぐうクルミ。

「：雄一さんには雄一さんにふさわしい人がいるはです。その人と幸せになって下さい。私はずっとあなたのファンでいます。これからもずっと：ですからこのお話はお断りしたいと思います」

クルミの言葉を聞き終えた高藤。キュツと締まった口元がほころぶように緩くなり、ゆつくりと彼の口が開かれた。

「もう言いたいことは言えたかな？ じゃあ今度は僕の言うことを聞いてくれるね？」

ハンカチで鼻を押さえながら縦に首をふるクルミ。

「悪いけど僕はね、君の意見に反論するから」

「……！？」

高藤は姿勢を正して正座になった。

「僕には君しかない。君は僕の運命の人だと思ってる」

「：そんな運命だなんて大げさな…」

「いや、そうなんだ。あの日：忘れもしないあの日、僕は心に誓ったんだ。将来僕が結婚する人はこの子だってね」

「あの日って：？」

「あの日さ。高3最後の地区予選。美德館学園に負けた翌日、君の家を訪ねたときのことさ」

そう言われてクルミがすぐに思い出したのは、高藤が自分の家を訪ねて来たことよりも試合内容の方だった。

あの試合は彼女にとっても印象深い壮絶な一戦であり、最後の打席で大飛球を打った高藤の打球は心に刻まれていた。

「あのときの試合はよく覚えてます。でも私、翌日の事は：あまり：」

「いいんだ。僕はしっかり覚えてる。君はあのときこう言った。『プロになって活躍して下さい』ってね」

「ええ：確かに。それは憶えてます。だって、本当にそう思ったから：」

「僕はその一言で何十倍ものパワーが湧き出たんだ」

「私のおんなだった一言で：？」

「うん。もちろんその前にも君と田安のおかげで、やめていた野球を復活できたのもひとつのきっかけでもある。あのとき君に許してもらえなかったら、もう一生野球なんかしてない」

「・・・」

「わかるかい？僕をプロの世界に導いてくれたのは君なんだよ。今の僕があるのは君がいてくれたからなんだ」

「でも・・・」

何か言おうとしてもそれ以上言葉が出て来ないクルミ。

「僕の一方的な言い分かもしれない。でも決して君をケガさせた責任から言ってるんじゃない。僕をここまで支えてくれたのは君の言葉であり、君の笑顔なんだ。僕は君の笑顔をいつまでも見ていたい。いや、いつまでも笑顔でいさせてあげたい」

「なぜそんなに私に：？」

「なぜって：そりゃ君が大好きだからに決まってるじゃないか。ずっと好きだったんだ。確かに最初はお詫びの気持ちでいっぱいだった。でも君に会うたび、その気持ちは愛情へ変わって行った：そして今は君がいとしくてたまらないんだよ！」

高藤自身、冷や汗ものだった。よく恥ずかしげもなく言えたと自分に感心した。

それと同時に、自分の本当の気持ちをクルミに告白できたことでホッとした面もある。

「返事は今すぐでなくてもいいよ。もう一度考えてくれないかな？」
クルミは静かに頷いた。

そしてその1か月後、クルミは高藤雄一と結婚する決意を固めたのである。

過去の回想から冷めた高藤。ベッドに横になっているクルミの髪をそっと撫でる。

「これから俺がお前を支えてゆくよ…」

クルミもまた、夢うつつの中で過去を回想していた。

それは夫である雄一が、突然の引退表明を言い出したときのことだった。。

（続く）

36話 心に刻まれた夢

クルミの見ている夢は数ヶ月前のリアルな回想だった。

自宅のリビングで向き合っている二人。目の前にはテーブルにお茶が二つ。

高藤雄一は意識的にリラックスを装っている。

それが手にとるとうにわかるクルミ。

彼女の動揺を少しでも軽減するため、張りつめた空気を避けたいのだと。

「俺どうもさあ：昔のように体が言う事きなくなっちゃってさ。

ここいらがもう潮どきだと思うんだ。悩んでてもしょうがないし、今シーズンでスッパリ引退しようと考えてる」

「！！！」

当然ながら、雄一がどんな言い方をしようと、突然の引退宣言にクルミはショックを受けないはずもない。

ただそれは単なる引退への驚きだけではなく、その理由が彼の本意ではない事を彼女はいち早く悟ったからでもある。

「ウソはやめて。あなたは私のせいで引退するつもりね。私の視力が悪化して、人の世話があるようになったからでしょう？」

「いやいや、俺のパワー不足さ。もう俺は昔のようなパワーは出ないんだ。だからもうこれからはクルミと一緒にいる時間を増やそうと思ってるだけなんだ」

「そんなこと…」

「今まで遠征で長く家を留守にしただろ。ウチには子供もいないし、クルミには随分寂しい思いをさせたと思う」

「もう新婚じゃないんだし、そんなことはいいの。あなた無理しな

いで。あなたはまだまだ野球がやれるはずよ。私の介護のために引退するなら：そんなためなら：いっそ私と離婚して下さい！」

「Σ（□□）；なんだって？？離婚だって？！」

脳内に衝撃が走るのをリアルに感じた雄一。

「私、あなたの重荷にはなりたくないの。私がいなかったらあなたは伸び伸びと大好きな野球ができるわ」

予想外の離婚発言を切り出され、動揺しながらも観念した雄一。やはりクルミのような勘のいい女性にごまかしは効かない。

「じゃあ正直に言う。確かに引退を決意したのはお前の視力が低下したのが1番の理由だよ」

「そんなこと：すぐにわかったわ」

「でも聞いてくれ。俺とお前は夫婦だ。俺がお前の面倒を見るのは当然の話じゃないか。それなのになぜ離婚なんだよ？」

「だって：あなたの人生が私の犠牲になることなんてないじゃない！」

感情が高ぶり、少し声を荒げるクルミ。

その様子を見た雄一は、つとめて穏やかな口調で彼女に接するよう心がけた。

「クルミ、俺は何もお前の犠牲になるなんて一度も考えたことがないぞ。むしろ喜んで引退するんだ。これで夫婦水入らずでもんじゃないか」

「ウソ！あなたはいつも表舞台の人。私みたいな日陰の存在になる必要はない。あとで後悔するわ。本当に無理しないで！」

深くため息をつく高藤雄一。だがクルミに対しては微笑みを絶やさずに対応した。

「なあクルミ。お前は俺の気持ちをあまりわかってないようだなあ……」

「……？？」

「いいかい？俺は無理なんて全然してないんだ」

「…してるわよ」

「いいや、してない。絶対に！」

少し語気が強くなった雄一。その目はまっすぐクルミに注がれている。

「クルミは今までずっと陰で俺を支えてくれたじゃないか。だいいち、俺がプロに入れたのも後押ししてくれたクルミのおかげ。食事の栄養管理も任せっぱなしだった」

「そんなの当たり前のことだし、それとこれとは話しが違うわ」

「同じだよ。俺はお前のおかげで充分野球ができた。でも俺はお前に今まで何もしていない。何もやれてない。だから次は俺がお前にしてあげる番なんだよ。そしてそれが今なんだ。これは俺の希望なんだよ。野球に未練など全くない！」

そう言われたところで、クルミはそれを丸々鵜呑みにできるはずもなかった。

「信じられない。18からプロに入って今まで20年以上も野球一筋で生きて来たあなたが、もう野球に未練がないなんて…」

「ああ、それはなんつか、言いにくいんだけど……この年で俺がこんなこと言うのもなんだが……俺は野球よりもお前が大事なんだ。お前にずっとそばにいてももらいたいからなんだ……すげえ恥ずかしいけど言っちゃったぜ>(；　ゝ　ゝ　ゝ)」

その言葉を聞いてクルミは素直に嬉しかった。昔からシャイな雄一が、熟年にもなった今でも、自分を大事に思ってくれることを口に出して言ってもらえるなど、思ってもみなかったからだ。

「あなた本当にそれでいいの？」

雄一は座り直してお茶を一口飲み、ゆっくりと話し出した。

「なあ、まだ覚えてるか？俺の高3のラストゲーム。あの日の9回裏のことを？」

クルミは躊躇もなく答える。

「忘れるはずないでしょ。負けちゃったけど、あんな奇跡的な集中攻撃、20年以上経った今でも見たことがないわ」

「あの試合は負けたからこそ、クルミと深い絆ができたんだと思うんだ」

「負けたから？」

「全てがあの場合面に集約されるんだ。俺の最後の打席にね」

「どういうこと？」

「あのときの当たりは完璧だった。間違いなく飛距離も充分なホームランだった」

「ええ。憶えてるわ。センターの超ファインプレーに阻まれなかったらきつと…」

「でも捕られた。あの打球を捕るなんてまさに神業だよ。そして結局は負けたんだ」

「そうね…」

「俺思うんだ。あの試合はああいう負け方をしたことに、深い意味があったんじゃないかってね」

「意味？」

「あのとき俺が逆転サヨナラホームランを打ってヒーローになっていたとしたら、俺はお前の言葉を軽く聞いていただろう。目の前の大切な人の存在も忘れてしまったかもしれない」

「………」

「人は負けた方が次は精神的に強くなれる。俺は必然的にリベンジの機会を与えられたのさ。それは野球だけを意味するものじゃない。大切な人のことを忘れず、恩を返して支えてこそ真のリベンジなんだ。それをあの9回裏が教えてくれた」

「…私、どう言ったらいいか。」

「ごめん。少しスピリチュアルなこと言い過ぎたかもしれん。でもな、あれから長い年月が経った今、やっとそのリベンジの機会が訪れたんだ。俺がお前の目となり耳となる。それができてこそ、高校時代のリベンジが成功するんだ。だからあのときは負けて良かったのさ。俺の一生のパートナーと巡り合うためにも」

何か狐につままれたような話だけれど、雄一の心根は充分に察し

たクルミであつた。

ホテルのベッドで横になっているクルミが回想から覚めると、雄一に髪を撫でられているのがわかった。

「：ん？あなたどうしたの？眠れないの？」

雄一が微笑みながら言う。

「だってスイートなんだぜ。すぐ寝るのもったいないじゃないか」

「まあ、あなただったら。」

心もち顔を赤らめるクルミ。

「ハハハ：冗談だよ。田安のやつ、わざわざスイートなんて予約しやがって。こちらら新婚でもないのにホントこっ恥ずかしいぜ」

視力低下のため、今のクルミには雄一の表情がよくわからない。だが声の微妙なトーンから、自分の亭主の表情は読み取れる。

「今日の引退試合、田安さんにお礼しなきゃね。教えてくれたのも彼だし」

「あいつにはかなわねえや：」

「でも信頼できる人でしょ？」

「ああ。あいつだけには何でも話せるってか：まあ親友だしな」

「なぜ今日の試合、私に教えてくれなかったの？」

「それはその：」

「言わなくてもわかるわ。私があなたを引退に追い込んだって、また言い出すと思ったからでしょ？」

「ハハハ：クルミにもかなわないな：」

「なんならまた野球してもいいのよ」

彼女が少しイタズラっぽそうな笑みで雄一に言う。

逆に雄一はキツパリと毅然とした口調でクルミに返答した。

「いや、俺はお前のそばにいるのが生きがいだよ。下の世話もしてやる」

「ちよつと：（へ―へ；）それはまだ大丈夫よ」

「遠慮するなよ。これから思い出いっぱい作らなきゃな」

「今までだって、思い出たたくさんあるじゃない？あの9回裏のことだって」

意外にも雄一はそれに対しては否定的だった。

「いいや。あの試合は思い出じゃないよ。あれは現在とリンクしてるのさ。俺のリベンジマッチは今も現在進行形だからね」

（続く）

37話 これからのこと

旭ワイン球場監督控え室にて――

東郷にひと通りの説明を終えた田安。

「これで奥さんに対するあいつの愛情の深さがわかったかな？」

感慨深げの東郷。それは抱いていた疑念を全て取り消し去るほど、じわじわ伝わって来る感動に他ならなかった。

「ええ：深いですね。。まさに奥さんを愛するがゆえだったとは。頭が下がります」

「私もだよ。あれだけの愛情と思いやりのある言葉を自分のかみさんに面と向かって言えるなんて、私には絶対無理だ」

東郷は田安から聞いた話に只々、感心しきりだった。

「それにしてもすごいですね：高藤選手は田安監督には何でも話すんですねえ」

「あいつは義理堅い男だね。遠い昔に私がしたおせっかいを、いまだに感謝してくれるのさ」

「高藤選手は監督に貸しがあったということですか？」

「いやいや、そんなんじゃない。貸しというなら私こそあいつに貸しがある。随分と世話になった」

「はあ：？あのお、良かったらどんなことか教えていただけますか？」

「見ての通りさ。今こうして私がここにいることが高藤のおかげさ。そう言われても東郷には事情がさっぱりわからない。黙って田安の次の発言を待つのみだった。」

「私はね、野球では何の実績もないんだよ。高3のときも補欠だった。最後の試合の9回裏に代打で出たのが唯一の打席だったんだ」

「で、結果はどうだったんです？」

「ヒットだよ。バントヒットだったんだがね」

「すごいじゃないですか！セーフティバントは勇気がいりますよ。特に9回裏なんて」

「ハハ…だがたったその1打席で私の野球生活は終わったはずだったんだ」

「でも違った？」

「うむ。こんな実績も何もない私を今から5年前、いきなり独立リーグの監督に推薦してくれた男がいたんだ」

それを聞いてすぐにピンと来た東郷。

「ああなるほど。それが高藤雄一選手だったんですね？」

「その通り！」

「しかしそれもすごい話ですね。監督に就任されてから5年で3度の優勝。高藤選手は監督の指導力を見抜いてたってことじゃないですか？」

「それはどうかわからんがね。俺もあいつには頭が上がらんよ。今回、あいつの引退試合を企画したのも、そんなお札の意味も含めてのことなんだ。あくまで非公式であり、シークレットってことだね」

——美談だ。美談すぎる。記事にすれば間違いなく世間の心ヲシづかみにできる！そして高藤や田安を賞賛するに違いない。だが……

「東郷くん。このことを記事にするかしないかは君の自由だ。君の判断に任せる」

「あの…ひとつ聞きたいんですが、なぜ僕にそこまで話してくれたんでしょうか？」

わずかに微笑む田安。一呼吸おいてからその質問に応じた。

「んー、実は正直どうしようか迷ったんだ。だが君が根っからの高藤ファンなことにウソはないとわかったし、根性が曲がってるとも思えなかったからしゃべる気になったんだ」

「僕の根性ですか：（一）；」

「あいつはマスコミには一切しゃべらない。さっきも言ったが、奥さんのことがあるからだ。でも私としては、誰かに知っておいてもらいたかった。高藤雄一という素晴らしい男の人間性をもっと知って欲しかったんだよ」

「……そうですか。。ありがとうございます。とても良い話を聞かせていただきました。じっくり検討させてもらいます」

一礼して監督室を出た東郷。部屋を出た瞬間から悩み始める東郷。「書きたい：絶対書きたい……しかし。。」

こうして高藤引退の真相を一般に公開するか否かの決断は、全て東郷の手に委ねられたのである。

（続く）

38話 25年後の付け足し

悩める東郷が最終的に下した結論：

それは単に、記事として掲載するのではなく、書籍として1冊の本にまとめるという考えに至った。

そののち東郷は、通常の記者としての職務のかたわら、ひそかに執筆活動も開始していた。

そして半年後、地道に書き進めていた彼の原稿がついに完成したのである。

このときのタイトルは下記の通り。

『高藤雄一・引退の真実』

だが、この原稿がすぐに書籍化されたわけではなかった。

東郷自身、この作品は自費出版するつもりであったが、自らの意志でその時期を先延ばしにしたのである。

むろん、これは決して何らかのトラブルのせいではなく、全て彼の計算上のこと。

実際にこの本が世に出たときは、高藤が引退した年から数えて25年後のことになる。

とてつもない歳月を過ぎてからの出版は、東郷から高藤夫妻への細やかな配慮に他ならない。

東郷はこの25年もの間、もし万が一自分の身に何か起きたときのために、この原稿を西暦20××年に出版するよう、家族宛てに出版費用と共に遺言までしたためていたほどの念の入れようだった。しかし、その遺言はやがて破棄された。そう、彼は30年後も健在だったからである。

すでに還暦は過ぎてはいるが、健康状態にはさほど問題もなかつ

た。

いよいよ自らの手で出版にこぎつけるにあたり、彼はこの本の“あとがき”を更に数ページ付け加え、タイトルも変更した。

こうして正式に刊行された本のタイトルが以下である。

『伝説の野球人・高藤雄一とその妻』

この作品には、高藤が青春台高校時代のチームメイトへの取材や、彼と特に親交が深かった田安の証言を元に書かれている。

もちろん、彼の輝かしいプロ生活での実績、未だに破られていない記録についても触れられているが、話の中心はやはり高藤雄一とその妻クルミの歩んて来た道のりについてである。

この本の最大の特徴として見逃してならないのは、高藤が引退してから25年が経過してから書き加えられた“あとがき”である。高藤引退の謎が明かされた本文のエピローグの後、まさに続・エピローグとも言うべき“あとがき”

この物語の最後として、その内容をここに記すことにする。

あとがき

——（中略）——

読者の皆様へ

ここからは、前文から25年の月日が経っていることを理解していただきたい。

この長い歳月の中、今年になって私が夢にも思わなかった出来事が実現したのである。

これを書かねば、この本の刊行が中途半端なものになってしまう

のは間違いない。

それは清々しい秋空の元に行われた高校野球OB大会でのこと。
この時すでに59歳のベテラン記者になっていた私は、余興と言えどこのカードは是が非でも見逃せない試合だったのだ。

『青春台高校OB 対 美徳館学園OB』

当日、私は彼の姿を一目見ようと興奮のあまり、我先にと球場入りしたのである。

私はバックネット裏の席に腰を下ろすと、グラウンド内ではかなり老いた元高校球児たちがウォームアップをしている。

その中には紛れもなく、高藤雄一が存在し、彼のライバルだった羽柴までいるのだ。

計算すると彼らはもう68歳のはず。見た目が老けているのは当然の話。だが昔の面影は充分に残っている。

間もなく試合が始まろうとしていたとき、見覚えのある人物が青春台ベンチからネット裏の私を呼び寄せた。

「よく来た東郷くん。久しぶりじゃないか。まだ記者やってるのかい？」

「田安監督！」

「アハハ。もう監督はとくにやめてるよ」

「あ、そうでした。どうもすみません^^;」

「どうだい？そこで見るよりウチのベンチで見ては？」

「え？いいんですか？」

むろん私にとっては願ってもないところ。より間近に憧れの選手が見れるというもの。

快諾した私は、いい年をしながらもこぼれる笑みを抑えきれず、ベンチに向かったのである。

そして私はそこに着くなり驚いた。

田安元監督に案内されて座ったその隣には、年配の女性がひとり先に腰を下ろしていた。

私はすぐにピンと来た。わざわざ聞くまでもなかったが、田安元監督が彼女を丁寧で紹介してくれた。

「こちらは高藤の奥さんのクルミさんだよ。今日は奥さんの強い希望でここに来たんだ」

軽く私の方へ会釈をしてくれた彼女は、清楚で身だしなみも良く、とても美しい年の取り方をしていた。

「クルミさん、こちらの人は東郷君。記者の人だね。子供の頃から高藤の大ファンだったんだ」

私はそれに少しだけ言葉を添えた。

「いえ、今でもずっとファンです。高藤選手は少年時代からの憧れですからね」

「まあ：なんて嬉しいことを。主人に聞かせたいですわ。ありがとうございます」

「いえいえそんな：」

すでに高藤選手他、メンバーたちは守備についているためベンチにはいなかった。

「私、ご覧のように目が不自由なもので、今日はこうして田安さんにご迷惑をおかけしてますの。田安さん、本当にすみませんね」

「そんなの気にしないで下さい。お相手がこんなジジイですみませんけど」

次にクルミさんは私の方へ顔を向けて言う。

「おかしいでしょ？ 目が見えないのに野球を観戦しに来るなんて。でも私、耳には自信あるんです。打球の快音で長打か短打か、ゴロかフライか、わかるんです」

「へえ！それはすごいですねえ」

憧れの高藤選手を影で支えた彼女と、こうして間近で接すること

ができたことは、私にとって素直に嬉しいことであつた。

このOB大会の最大のヤマ場は最終回に訪れることになる。

5－3で美徳館が2点リードで迎えた青春台OB最後の反撃。

一死1，2塁でバッターは高藤雄一。

こういう場面に必ず巡って来る彼の打順。

一度きりの人生において、こうなることが高藤の生まれ持った運^さ
命^{だめ}なのだろうか。

（続く）

エピローグ

独立リーグ元監督の田安さんは、この試合でも監督の役目だった。私とクルミ夫人は、前列のベンチに腰かけて観戦していたが、監督はベンチから少し出た位置でずっと立ちながら、選手たちに声をかけたり手を叩いたり、ムードメーカー的な存在。これは昔と全く同じスタイルである。

そんな中、不意に発せられた夫人の言葉。

「主人はきつとホームランを打ちます」

「えっ？」

一瞬私は耳を疑った。

凜とした態度で、それでいて穏やかな表情で、真正面のグラウンドを見据えながら高藤クルミが言っただけ。

私はそれに対してどう受け答えるべきなのかわからず、

「そうですね。だいいいですよね…」

くらいしか言葉に出なかった。

盲目の人は聴覚をはじめ、その場の空気を読み取る感覚が研ぎ澄まされている。

そんな私の心ない同調が見事に見透かされた。

「東郷さんは無理だと思ってるでしょ？」

核心を突かれてたじろいだ私。

「いえその…無理とかじゃくて、そうなってくれたら最高なのにと…」

「いいんです。普通なら誰でも無理だと思います。68のおじいちゃんにホームランを打つ力はないってね」

「……」

私は肯定も否定もできないまま、閉口するしかなかった。

そんな空気の中、クルミ夫人は静かにグラウンドに目を向けながら、

やんわりとした口調でな話し出す。

それは私にとって、何とも不思議な話でもあった。

「実は、主人が現役選手だった年数と、引退してからの年数が今年で並んだのです」

「えっ？…ああ、そう言えばそうですね」

「そんな年に今日初めて開催された××年卒のOBイベント。そして卒業から50年も経っているのに一人も欠けずに全員がこの場に揃った。しかも相手のピッチャーまでもがあの時の羽柴さんなのです。これってある意味奇跡だと思います？」

確かにそう思えた。普通ならこんなに歳月が流れると、住んでいる場所も全国散り散り、事情で来れなかったり、あるいは病気だったり、悪く言えばお亡くなりになっているメンバーがいてもおかしくない。

更に言えば、このようなイベントが行われること自体、予想だになかったこと。

「そうですね。不思議というか…奇跡かもしれませんね」

「私、思うんです。変な言い方かもしれませんが、この場面はまさに用意されたものだって」

「用意された…というത്？」

ここからは少しスピリチュアルな話になった。

「50年前、9回裏二死満塁逆転サヨナラの場合で、あの人は完璧なホームラン性の当たりをセンターの神業的なファインプレーで捕られて敗北しました」

「はい…昔の記事で読みました。その場にいたらどんなに良かったかと思っただけです」

「主人はあの意味を私に尽くすため、私を忘れないために与えられた人間としての義務であり、宿命だと解釈しました」

「……はい。。」

「あの人の持つ宿命というものが私に尽くすことなら、この25年間、主人はその役目を充分に果たしてくれました。現役時代と同じように、同じ年数をずっと私のために…」

言葉に詰まったクルミ夫人の目には、光るものがあつた。

「私はたった今、直感したのです。もしそれが…その宿命が本当の事なら…これが天に用意された場面であるならば、この場面には必ず終止符が打たれるはず…」

「終止符…?」

「ええ…つまり、ここはホームランしかないんです!」

こうきっぱり言い切るクルミ夫人に、私は動揺した。

もし高藤の結果がそうでなかった場合、彼女は言い訳のしようがない。

だからと言って決して彼女を責める気もないが、隣にいる私としては、どんな言葉を用意したら良いのかと、内心穏やかではなくなっていた。

「奥さん…高藤選手は素晴らしいバッターでした。今でも破られていない彼の持つ偉大な記録が物語っています。彼はすでに生きた伝説です」

「ありがとうございます。随分主人を褒めて下さるのね」

「はあ…しかしです。しかしですよ、お言葉ですが彼は現在、年齢的にも肉体的にもオーバーフェンスを狙うのはさすがに厳しいかと思えますよ」

「……」

クルミ夫人は黙っていた。私は気が引けて仕方なかったが、先にもう一言っておかないと、後に出る結果のフォローが余計辛くなるからだ。

「奥さん、ホームランとはいかないまでも、打球がライン際を抜け

れば、一気に同点のチャンスも：」
と、その時だった。

——カキイイイイ——！！——

「えっ！??」

「まさか！！」

思わずこう叫んだのが私と田安監督。

左バッターの高藤雄一が思いきり引っ張った打球——

それはライトスタンド上段まで運ぶ大ホームランだったのである。

「す：すごい！とても68歳の打球とは思えない：」

まさに私と田安監督は度胆を抜かれた。

「奥さん、ホ、ホームランです。逆転サヨナラホームランです！」

そう言って夫人の方へ振り向くと、彼女はすでにベンチから立ち上がり、自分の胸の前で合わせた両手を握りしめていた。

ダイヤモンドを1周し、敵からも味方からも全員に祝福された高藤雄一は、ベンチ前にいるクルミ夫人の前まで駆け足でやって来た。

「クルミ……終わったよ。あの日の9回裏が：やっと今日でね」

「ええ：そうね」

「この試合はこのメンバーじゃなきゃできなかったことだと思う」

「わかるわ。これはあなただけの試合じゃない。青春台のミラクルは、あのときの選手全員から始まった。全員が主人公だものね：」

「ああ：その通り」

私は衝撃を覚えた。この夫婦は何もかも、全く同じことを考えていたのだ。

老年になっても、こんなに心がしっかりと通じ合っている揺るぎない夫婦の絆。

野球人としての尊敬はもちろんの事、夫婦のあり方、人間のあり

方についても頭が下がる思いでいっぱいだった。

この二人にとって、終わっていなかったあの9回裏が、50年の歳月を経て、ここに幕を閉じたのである。

そして、その後の高藤夫妻と言えば、バツタリとメディアからはナリを潜め、慎ましかではあるが、楽しい余生を過ごしていると聞く。

私にはまたひとつの興味が持ち上がった。

高藤雄一が引退してから、クルミ夫人を支えた25年間の沈黙の時代はどのようなであったのか。

これを知るカギは私自身への今後の課題として、自分の足で取材することになろうと思う。

以上で私の補足したあとがきは終了するが、読者の皆様方には理解していただけただろうか？

この補足分を執筆しなければ、この本は完成とは言えないことを。

そしてこれを機に、折を見て高藤雄一という伝説の野球人について、その人生や功績にわずかながらでも触れていただければ幸いに存ずる。

東郷淳平

(完)

エピローグ（後書き）

余談ですが、登場人物の姓名は全て、戦国武将と幕末の薩長軍、幕府軍を利用させていただきましたが、特に意味はありません（^_^;）

最後まで読んで下さった読者の皆様には心より感謝致します。ありがとうございます。

できればほんの一言でも感想をいただけたら嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1823f/>

あの日の9回ウラ

2010年10月8日14時25分発行